

J2.99:6

6 of 20

July 1944

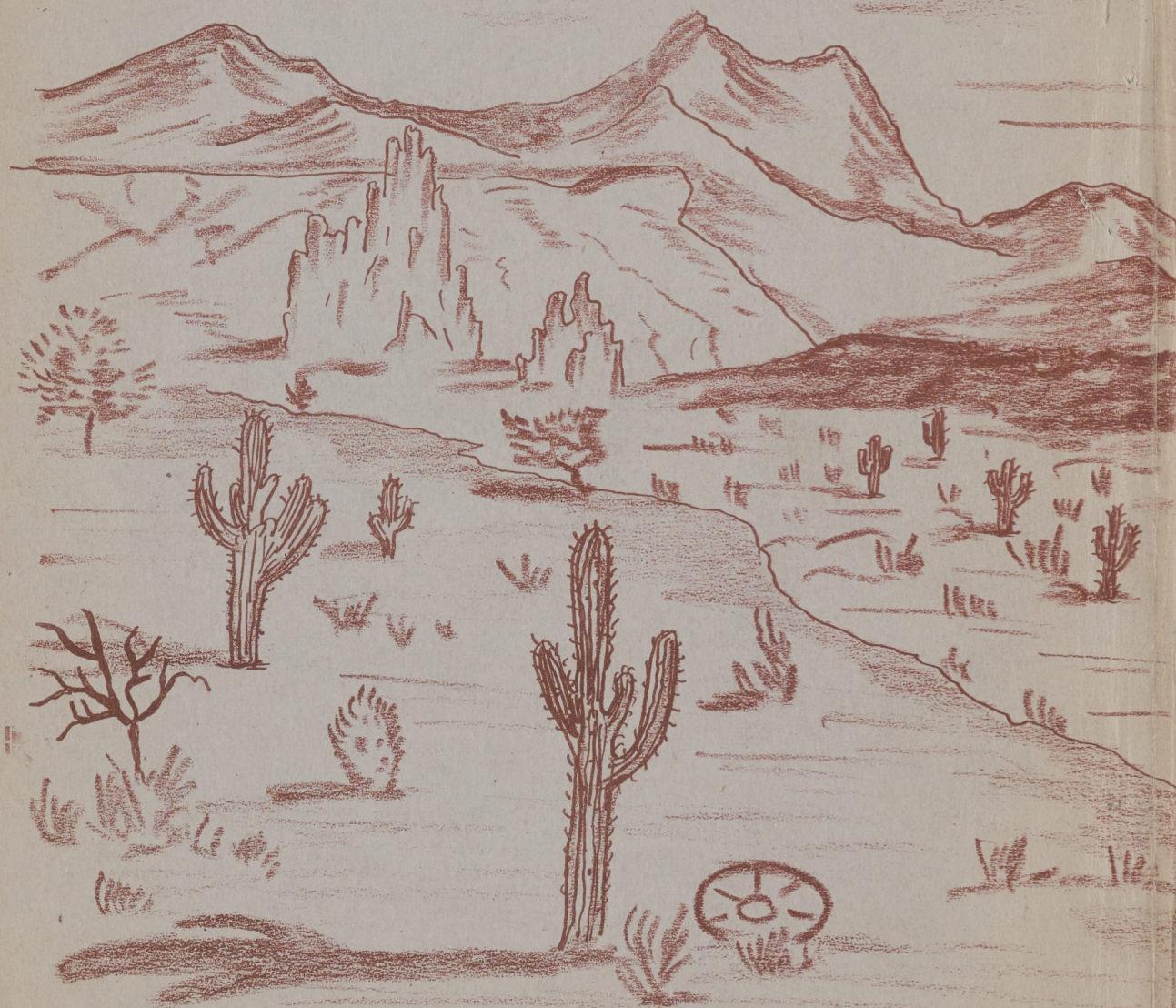
67/14  
C



# ボストン美術

000

七月號





表紙繪

門脇仁画

カワト

門脇仁画  
連藤舟水画  
瀧井生筆

原巻頭言

1

ポンス文藝讃

P.B.ブラウン

2

大詩人と文豪

野田夏泉

5

青葉の笛

矢形溪山

16

とらはれぬ心

外川明

18

魚釣

山西里江

20

民族愛と戀愛

深田敬

24

私のわがひ

岩永天派

26

配所の月

長谷川生

28

小泉八雲

土屋天眠

31

轉住の行方

ロイタザワ

34

教育管見

有田百

36

記念のサイン

ポンス文藝

詩甘藷の夢

あきら 40

詩南海の靈

土屋天眠 42

詩生活断章

片井漢子 43

短歌

永瀬勇選 44

俳句

和氣湖月選 51

川柳

島原潮風選 53

情歌

瑞海士 57

民謡

櫛田 52

小説

出世産

真澄 丘 63

一世の氣慨

芳川積三 66

落第生

大地 潔 70

編輯後記

76



あまの干

矢形沖夫妻を送る



黄金の国日本に憧れたコロンバスはア  
ノリカを発見した。新大陸に憧れた日本  
人は日輪住所を発見した。

希望、冒険、苦難、奮闘、歓喜そうし  
て失意。だが、地球は廻つて居んだ。  
輪廻が宇宙の法則だ。悲しみも、喜びも  
明も暗も、対立する両極、表と裏、二に  
して然も不可分離の一だ。悲しみなくし  
て喜びなく、表なくして裏はない。

失意と悲哀、灰色の輪住所。人我等の  
心に、慰安と激励と希望の光りを掲げて  
くれた溪山氏は、戦塵渦巻く混沌たる外  
部に、その後に来るもの、更に大なる  
光りを発見せんとして、新しい土地に向  
つた。何を発見するか？ その便りを我  
等は斯待する

では Good Luck, MR. & MRS. YAKATA!

公東 雄



"MARUSHO"  
The FINEST SHOYU

Showa Shoyu Brewing Co  
Rt. , Box 51, Glendale, Ariz.

昭和醬油醸造会社

アリゾナ州グレンデール



ホストン文藝協會新幹部島原潮風、松原信雄  
 有田百、三氏の歡迎及び矢形漢山氏送別を兼ねた文芸同好  
 諸士の懇親会は六月十二日午後八時よりブロック三十二  
 マスホールに於て催され席上記念の署名をなせり

見玉良之助  
 佐野節子  
 有田緑清  
 門脇仁  
 有田百  
 正木良夫  
 亀重久  
 田中光雄  
 1944  
 Teruko Mayeda

永井添太郎  
 須藤田  
 外川  
 芳川  
 浅森  
 野矢  
 積子  
 明子  
 村松









## 卷頭言

精神が主か物質が従か、そんな議論は哲學者に任せておこう。肉體(物質)と精神との結合體である人間が、人間らしい生を維持してゆくには肉體の糧と精神の糧が必要であることは今更論を俟たない處である。人間が單に動物的な生存をついける為ならば食物で充分であるが、人間らしい生命の生長を望むものには精神的營養物と飲ん事は出来ない。その最も滋養に富んだ營養物の一つが文藝である。特に我々轉住所内の同胞にとつてそれが最も必要であると思ふ。營々辛苦幾十年、漸く基き上げた經濟的土台を戦火と共に根底から覆された我々、生きてゆく為の食物は供給されてゐるが、我々の精神は常に病毒の襲撃にさらされてゐる。たとへ我々は不如意な環境に置かれてゐても、その環境に負けない為の健全な精神力の養成が必要である。失望の為沈滞せんとする精神を慰藉してくれ。自暴自棄に陥さんとする精神を鼓舞激勵して呉れるよき文藝こそ轉住所内同胞に最も必要なものである。少く我々はさう感じて、この文藝誌の刊行を續けてゆくものである。

家稿家、讀者諸氏の御援助を乞ふ。

(N.M)









## ポストン文藝を讀ふ

ポーリンBブラウン

深き情緒も最もよく表現する言語は詩である。

喜怒哀樂の情、或は又、郷愁、悲哀、憂國の情と云つたものは、これ全て詩人の琴線に觸れて、高鳴るリズムカルな言葉の中に於てこそ、最もよく表現の形式を見出すものと云へませう。

沿岸よりの立退、そしてセンチターに於ける生活、暗鬱たる前途——それらの苦き杯の中から、ほのぐと萌し初めし黎明の訪れ、そして今や決然として新生の門出に立たんとする勇氣の回復……私は未だ嘗て斯くの如き偉大なる長聯の詩が書かれたことを知りません。失意の嵐は皆様の上に襲ひかゝつたてでありませう——が最も麗しき詩は、實に傷める失意のドン底よりこそ生れ出づるのであります。

恩苦は皆様の裡に悲愴なる短調交響樂を奏でたてでありませう……しかし悲哀の日は今や一場の夢物語に化さんとしつゝあります。そして、運命の扉を叩く力強いスタカトの旋律は、限りなく皆様の詩情をそゝるものがあ



Poetry is the language of deep emotion. Love, patriotism, sadness, despair, bitterness, homesickness, joy--all are best expressed in rhythmic words which seem to match the turbulent heart-beat of the writer.

Never in history has happened an event more likely to produce great poetry than evacuation, and the subsequent life in the center: the uncertainty of the future which must have assailed every person affected; the rise of hope in breasts which must have harbored some bitterness; the slow dawn of belief in a brighter future and the return of courage to make a new start.

Despair must first have placed its heavy hand upon your hearts--but the most beautiful poetry the world has known has risen in the vapors from the dregs of despair. Resignation must have turned your music to a minor key. But "the Saga of Sadness" is changing, and the staccato rhythm of purposeful thinking now marks your poetical expressions.

In Poston many of you have learned how truly the great Shakespeare spoke when he said "Sweet are the uses of adversity, which like the toad, ugly and venomous, wears yet a crowned jewel in its head". Your "crowned jewel" can very well be that here in a relocation center you have produced and preserved for the world, the emotional history of a never to be repeated era.

You who have participated in activities of the Poetry Club will not be those of whom Grey wrote when he penned:

Full many a gem of purest ray serene  
The dark, unfathomed caves of ocean bear;  
Full many a flower is born to blush unseen  
And waste its sweetness on the desert air.

Pauline Bates Brown



# ウォーキンミラーとヂヤツキロンドン

野田 夏泉

筆者は二十数年前、即ち渡米直後オークランド郊外レオナ、ハイトにミラー莊を訪ね、親しくミラー氏老丈人及其その忘れ形身、ワニタ嬢から氏生前の事ども詳しく聞きもし、遺物なども見せてもらつた事がある。今其の記憶を述べて當時の思出を記して見る。

十九世紀の末期から廿世紀の初期にかけて米國內のみならず、外國にまでも其の文名を轟かした、加州の文人が二人居た。それはウォーキン、ミラーとヂヤツキロンドンである。二人共日本及び日本人と多少の交接をもち、此の世を去つた時も、その隔たり三ヶ年に過ぎない。ミラーは現日本の大詩人にして、山岳家であり、美術の權威、野口米次郎氏の恩師である事は、衆知の事であるが、ロンドンには、日露戦争當時、従軍記者として日本へ派遣されて居た事も、知つて居る人は尠ないやうに思ふ。ミラーは一九一三年二月十七日、七十二歳の高齡を全うして、オークランドのレオナ、ハイトの山莊で没し、ロンドンは一九一六年十月二十二



りませう。

『報難の賜は常に甘味である。それは恰も、いと醜き蝦蟇でさへその頭上に一つの輝点をもてるが如きものである』と、沙翁は申しましたが、ホストンの皆様はこの言葉が如何に眞實を語つてゐるかを痛感されるに違ひありません。皆様が困難なるセンチターの生活にあつて克く文藝に精進され得難き情操の糧を日々社會に送られたことは皆様の『輝点』であり、皆様が目より顧みて欣びとされる所でありませう。

終りに臨み、私は文藝協會の皆様はグレーの詩を録け、文藝協會がしかあらざるやう祈るものであります。

さやけき光もてる珠玉<sup>たま</sup>あまた耀けど、

底<sup>そこ</sup>ひ知らぬ蒼海<sup>そうかい</sup>の暗黒きは秘めき、

美<sup>うま</sup>しきさがもてる花あまた咲けど、

沙漠<sup>さばく</sup>のしいまにあはれその色萎えてなん。

。寒氣の強い年には、春になつて木々の緑が一入繁茂する。人間は逆境に鍛へられて、初めて大成するのである。(ベンヂヤミン・フランクリン)



ルフ(海根)は幾度か映画化し、近時又、ザウキ、ロンドン傳記なる映画が非常に評判になつて居るやうである。勿論映画化したものは彼の傳記其儘でなく彼を一偉人型、ヒーロー型に造り上げられて居るものゝやうでもある。筆者はまだこの映画は見ない、只映画評が新聞や雑誌に現れたものからの知識だけである。

ミラーはインデアナ州に生れた人であるから、純粹の加州ウツ子ではない、然し後年加州に移り、サンフランシスコ及びオークランドに於て彼の文筆事業は完成せられ、シエラネバダの壮麗さと太平洋の雄大さとにインスピレーションを受けて生活して居た事は事實である、晩年の余生を王府郊外、恰も山頂より金門灣を眼下一望の下に見おろす、特に歴史的なレオナ、ハイトの宏大な地を選んで、其の山腹に、さうやかな安住所を得て、其處に引籠り、詩作に耽つて居た、野口米次郎氏なども、この山荘に於て、ミラー翁に師事し、勉強して居たものである。

オークランド市からハイワードに走る電車をオークランド東方教理の郊外に捨てて、エルム樹のあちち、こちちに繁茂する小驛より、山の午に續く、小徑を二哩近く北すれば、漸く山の香のする羊腸たる山路になる。此の邊は最早やミラー氏のレオナ、ハイトの一部である。更にこの山の小道を登れば、中腹にささやかな寧ろ、貧弱な堀立小屋に達す。周圍には薔薇が一面植へられてあつて赤、白、菊と色どりどり、艶麗さに先づ眼を見張るのである。山荘は、山腹の南側、南向きに立てられ、従つて



日、加州のグレン、エレンに於て齡四十にして客死して居るから、左程古い人々ではない。

両者はその性格から境遇に至る迄、全然相反する、面白い対照を持つて居た。ミラーは温厚な、學者肌な、一面トルストイを聯想する、白髪的美髯男と著書へ、容貌風貌、聖人らしい所あり、氏自身も、トルストイに似て居る事を誇りとし、トルストイの寫真とを並べ懸けたりして居るとも云ふ。然もトルストイに於ける如く、堅實な信仰に生きた、熱心な基督教信者でもあつた。之に反し、ロンドンに幼時より冒險心に富み、十七歳にして、既に舟乗りとなり、マドロスの群に投じ、其後アラスカのコンダイクの金鑛にエ夫となり、後再び、マドロスとなり或はトランプ（ポーラー）群の中に入り込み、米加大陸を歩きまわり、放浪生活と續り、港町や鑛山町を飲み廻り、あらゆる悪の中を、泳ぎまわつたやうである。この事は彼の著書、マートン、エデンヤ、バレーコンスはシー、ウルフ（海狼）などの、半自叙傳的小説の中によく伺ふ事が出来る。此天涯孤獨の自然兒、然も文名世界に響いた、ギヤツキ、ロンドンの遺骸がオークランド市の停車場に淋しく、着いた時之を迎へた、友人知己は僅かに数人に過ぎなかつた事を思へば、彼れが生活の半ばを想像する事は出来ると思ふ。

斯うした相反した個性を持つた二人に特に興味を持ち、親しみを持つ研究家も相當我等の中にある事と思ふ。特にロンドンに於ては、彼の傑作シー、ウ



しました。

「妾がよく我慢したとおつしやるのですか？」　こゝ我慢が出来ないやうでは、詩人の妻たる資格はありません。またヨネ（夫人は野口氏のことをヨネ、ヨネと我が子のやうに言ふ）の居た頃です。妾等には最早や食物がなくなつて、二三日は断食です。断食が二三日續くと、ヨネは山を下りてゆきました。オークランドか桑港へ行つたのでせう。そして二三日立つとヨネは袋に一杯の、食料を擔いで山に帰つて来るのです。其の間ミラーも妾も一週間でも、十日でも断食です。ヨネが帰ると一家は又にぎやかに食卓に向ふのです。時にはヨネは突然出掛けて二三週間、又時には二三月山に歸らぬこともありましたが、多分デーウオークをしてたのでせう。歸る時は必ず食料の袋を擔いで登つて来ました。皆平氣でした。食はずにでも平氣でした。今から考へるとヨネの居たあの頃は一番なつかしい。妾等の生活と言ふものは斯ふした生活でした。自分たちの肉體も、肉體征服して居たのです。一種の修業と言ふ風に考へていただけは満足です。妾は六十歳以上の今日、まだ活動寫眞を見たことはありません。石鹼すら妾は使つたことはありません。馬鹿らしいと思つてせう。然し妾はそれが満足です。詩人の生活と言ふものは斯うしたものです。驚いたでせう？、と續けて大聲に笑はれた。その眼には慈愛の母のやうな、いつくしみと親しみが感ぜられた。



日あたりのよい場所である。門かどに立つて、訪れると猶太人の老婆格好の肥った老婆がイエスと答へて出て来た。来意を告げると、これが故にラー氏の老妻人であつた。

人里離れた山中に、舊知でも訪れたやうな、親しさと、喜びとを皺の中の眼に浮べて。招じられるまゝ、小屋の中に入ると、タタキの土間に卓が一名と椅子が三脚、少し奥まつた所は、板張りの寢所となつて居た。其の竹簡素と言ふか、原始時代的と言ふか、中の様子に尠なからず驚いたのは筆者ばかりではなかつた。一行の三名は等しく感じたことであつた。實は名声の高かつた詩人ミラーだけに富貴家の別荘の設備はなくとも、相當の設備ある、彼が老後の安息所としての山莊を意中に画いて来たからであつた。

そして其の土間の卓こそは老詩人最後までペンを取つて書き續けた卓なのである。遺品としても何も高貴の匂ひのするものなく、質素な日用具あるのみであつた、筆者等が考へた事は、親子三人とヨネ野口までを加へて此の中に生活した不自由であつた。疑問はそこに来る。老夫人の語るに耳を傾けると。

『安等はあたた方の想像も、出来ない程の貧乏暮らしをして来ました。ミラーは其の名を尊んで、金銭も尊ばない人でした。著述の金が入つても之を生活に使ふことをせぬ人でした。あなた方日本人にはよくミラーの氣持がわかる筈です。金はいると其の金で一つの碑を建てるのです。この山の上を標して御覧なさい、各所に色々な石碑が立つてゐます。それが完成をミラー畢生の事業として居りました。生活の方はトテモ、苦勞



人より聞いた方面をたよりに探し廻ったが十誡の中五誡より見付けらる事は出来なかつた、いづれも同型の大碑であつて。

第四誡

Remember the Sabbath day, to keep it holy.

第五誡

Honor thy father and thy mother.

第六誡

Thou shall not kill.

第七誡

Thou shall not steal.

ミラーが如何にこの碑に投資し、自が生命を刻み込んだか、伺はれ、人間生活に不自由を忍んだか、うなづかれた。最後に頂上に出たが、此處は金門灣を一望のうちに見下し、右に遠くマウント・タムパイスを望み、柔佛の町、王府アラムダ邊まで一眼に入る絶景の場所である。この場所が即ち金門灣祭見者キャプテン・フリーモント、が大膽横断して此の所に著き、夕陽に映へて、金色の波漂ぶあの灣を眺め、跪いて神に感謝し、これにゴールドエンゲート(金門)と命名した所であると言ふ。こゝにもミラーはキャプテン・フリーモントへの大石碑を立て、このシオナ・バイトの頂上に著いた年月日と金門命名の歴史を刻して居る。

其他まだ、歴史的、宗教的な碑の幾つかあるとの事であるが、モーゼの十誡詣でだけではとの努力も残念ながら五基を訪ねた儘、下山の止むなきまでにタイムを取った。石碑詣でも樂ではない。又如何にこのバイトの宏大なる



『そして只今のあなた方の生活は?』との筆者の問ひに、

『今は斯うした、ミラーの跡も慕つて、訪ねて呉れる人々のお情けであそこにとやうに立つて指す。と見れば、直ぐ近くに、スタコ型の近代式のバヤスが建つて居る。『平字母娘三人この山荘を守つて居ります。殊にヨネのお蔭でさう。日本の方がよく訪ねて呉れます、それらの人々からお金は決して戴きません。かうした土産物を買つて戴くのです。』と卓の引出しからとり出した小袋は、サフリン、ペーパー様の小封筒で、白黄色とりぐの薔薇の花柄です。

『これは?』と聞くと『毎年此山荘の薔薇が散る毎に、親子でこの花びらを拾ひ集めます。之に香水を浸ませ、日陰乾しにした匂袋なのです』と其の一つの封を切れば、香気馥郁として、あたりを流れる。一行は各自にこの匂袋を求め、せめての志しにもと少しのお金を別に出したが、受けとろうとはしなかった。

一先づこの山荘を出て夫人より聞いた方角を後の山に分け入った。松杉の鬱蒼たる林であり、路もない、只山頂が目當である。石碑詣でも之では樂でない。

やうやくにして最初の一基を見つけた、近づいて碑面に吸はれるやうに見入れば之がモーゼの十誡中の、第二誡であつた。十呎以上もある大石碑だ、モーゼ十誡中の第一誡として、

"Thou shall have no other God before me"

と人類最初の法律制定者

の神、法律を刻み込んだ大石碑だ。早速寫真に収め、次は三人手分けして、夫



ウオーキン、ミラーローハ、一年インディアナ州で生れて居る。本名はシンシナタス、ハイナ― (Cincinnatus Hiner) であるが彼の小説『メキシコの山賊』ウオーキン、ムリエッタ (Joaquin Murietta) を公表後、彼のペンネームを、ウオーキン、ミラーと改名したさうであつて、最初、法律を學び、アイダホ州やオレゴン州に於て鑛山事業や出版事業に手を出し、實業界に飛躍した時代もあつた。後オレゴン州グラント郡、郡裁判所の判事として就任した頃から、詩作に没頭し出し、一八七〇年歐洲漫遊から加州に歸つて後、次々と詩集を出版するやうになつた。處女詩集『シエラの唄』 (Songs of Sierra) で一躍名聲を博し、引續き (Songs of Sun Land) や詩集 (Collected Poems) などをも世に送り、劇作集や、小説も相當數に達して居る。主に桑港で書き上げたものが多いと云ふ。筆者はミラー全集を求めて居たが、いつの間にか行衛不明である。

ミラーの遺言は奮つて居た、遺骸は火葬にし、其の灰はシエラ山頂より、風に散らせと言ふのであつた。氏は生前如何にシエラ山を愛し、シエラに執着を持つて居たか、詩人の心境が、あかるやうな氣がする。遺言通り、灰はシエラの山上にて峯吹く風に散らした。氏の靈と偉業とは、シエラ、ネバタと共に亡なる事がない。



かも知れり得るわけである。後聞いた事であるが、ミラー夫人ですら全部の碑を見たことかたないと思つて居た。

山莊の新宅ではミラー夫人が待つて呉れて居た。三室の小ジンマリした近代住宅で、パーラーにはピアノまで据つてゐる。お茶とお茶菓子は出た。スラックスをはいたタム、ボーイのやうな格好で、娘ワニタ嬢も挨拶に出る。母の命でミラーの詩『太平洋』の朗讀を聞かして呉れた。又父の詩を自分で作曲したと言ふのをピアノに向つて彈奏して、もてなしてくれた。十七八の娘であつたが、娘といふ柔い線やわらかの少ない娘であつた。山の中であつた為めでもあらう。

夕靄せまる頃この莊を辞した。お茶代として些少を紙に包んで、卓の上に残して来た。知るや知らずや、母娘ボヤコはいつまでも、いつまでも戸口に立つて見送つて居て呉れた。山莊の薔薇は風もない、しじまの中に、音もなく一ひうにちら散つて居た。

年毎に、薔薇の花散る毎に、あの山莊を憶ひ出す。ミラー夫人も今は故人となつた。ワニタ嬢も其後ハリウッドに出て映画にはいつたと新聞で見た。然し其後の消息を聞かぬ。山莊一帯のハイトはオークランド市へ寄附されたさうである。然しあのミラー莊だけは残して置き度いものである。自分はあれだけは残してあるものと信じる。



などがそれであり、之を階級争闘の序幕と見られて居た。實際に於て、ロンドンの出版数など當時驚くべき多数に達したらしいのである。

今一つロンドンの文壇界への貢献は、特種の一軌軸を小説界に生み出した事である。それは動物を主題とした新傾向小説であつた。アラスカ放浪中にヒントを得た『野生の呼聲』(The Call of the Wild)などのやうに、犬と狼の混血獣が人に飼育され、人に馴れて、やさしくペットされて居たが一度血族の叫び、狼群の、唌聲に依り野生に返り狼群の中へ飛び出して行くとならぬ書のものや、ホワイト、フワングのやうに飼犬が身を以て飼主たる主人を護ると言つたやうな前代未踏の小説境地開拓であつた。

又海狼(シー・ウルフ)は何度が映画化されたし、其の度毎に相當の人氣を博してゐるが、此の冒險小説の主人公、マドロス、シーウルフ船長は、極端な、無慈悲な、海狼こそ、ロンドン其儘のモデルであらやうに思ふ。

斯うした天才兒、ロンドンも其の末路一沫の悲哀を残した事は、彼の天性の然らしかる事とは言へ、彼の爲めに惜しむべき事に思ふ。終り。



デヤツキ、ロンドンの方は桑港生れで、純粋の加州ツ子である。一八七六年生れで、幼時より冒険を好み、少年の頃、既にオイスター海賊の仲間になつて居たとの噂もあるがそれは信疑明らかでない。十七歳の頃は、免許持の毎葉りとなつて、マドロスウ群に投じ、後アラスカ、クローンダイクの金鑛<sup>金鑛</sup>発見當時に第一番にかけつけたり。カナダ大陸や米國大陸も、オーボーウ群に投じ、トランプとなつて横断してみたり、あらゆる冒険事を体験した男である。然し文才は衆目の認むる所であつて、日露戦争勃発するや、某新聞社から従軍記者として日本へ派遣された。如何なる冒険にも血躍るロンドンには、好機逸すべからずと喜んで之に應じたさうである。後年メキシコへも派遣された事がある。

又小舟に乗り込んで在界漫遊に出かけたりしたが、この冒険体験が、ロンドン獨特の冒険小説となつて世に現はれる基礎をなしてゐたのである。

ミラーは生活の爲め筆を取らない人であつたが、之に反しロンドンは『金』の爲めに小説を書き、生活の爲めに報筆するのである、と自から公表して居た所が、ロンドンのロンドンたる個性の現れで面白い所がある。

彼の個性、環境から生み出す。著作は外國のある國々では、一つの社會主義思想として重視せられて居たらしい。『鐵足』(Iron Heel)とか、『階級戦』(The War of the Class)、『革命其他』(Revolution and Other Essays)



つての後、不思議にも二枝を生じたといふので、時の帝に献せしもの下、されこそ青葉の名を賜ひ、その従の帝に傳へられたるを、鳥羽院、平氏に下されしものといふことで、現在、寺に傳ふるところの笛を、昔のもの、やうに言つてゐるが、今の笛には、青葉のやうな形の彫刻があるといふことで、勿論、似てもつかぬ笛には相違ないが、

淡路島かよ、須摩寺さんか

聞けば青葉の笛が鳴る。

の民謡は、いふに優しい音の物語りも、須摩明石あたり徘徊ふ遊女に傳へて、そいふに其の音を偲ばしめる。  
(小唄傳説集に依る) 終

ホストン情歌

○主に別れて夜毎に通ふ  
○一目逢いたや語がしたや  
○征きし吾か子の寫桌をながめ  
○せがれさらばと雄々しく征けば  
○今の妾の心も知らず  
○波が荒みて故郷には行けぬ  
○親は憎いが子は可愛いと

夢は南國椰子の影  
せめて聞きたや風便り  
茶だち塩だち神詣り  
木戸の若葉に風薫る  
月は照るく野も山も  
故郷戀しや波憎や  
玄衣くが西東

隠士作





# 青葉の笛

矢形溪山

笛の上手、平家盛は、鳥羽院より下し給はつた青葉の笛を、平家盛に傳へたが、平家盛、笛の器量たるに依つて、小枝といふて愛藏し、合戦の間にもこれを持たれた。熊谷真實に詩はれた時、真實其首を擡ぎ、それを包まんと、鎧直垂を解いて見たところ、錦の袋に入れられた笛も發見した。さてはこの曉、城の内にて、管絃したるものは、此人にてあつたるか、當時、味方に東口の勢、数何萬騎かあるらめども、軍の陣に笛もつ人はよもあるまい。上臈はなほも優しい心かけのものではある」と、これを取つて味方の大将源義経の見参に入れたところ、傍で見ろ人さへ涙を流さぬはなかつた。ものゝあはれを知る義経は、即ち伊勢三郎義盛をして敦盛の首と、其の笛とを、攝津口須磨の須磨寺（上野山福祥寺と号し、貞言宗に属してゐる、仁和年中開鏡上人の開基にて、本尊は聖觀世音、其後、源賴政及び豊臣秀頼これを再興すといふ）に納められたといふのが、『平家物語』の傳へた、青葉の笛の由來である。

須磨寺の縁起によると、この笛は、その昔、弘法大師の作にかゝり、笛とて



中に投り捨て、しまはる。

あれも書き、これも詠み、もう詩の材料も盡きてしまつたやうに考へると、詩そのものに執はれた心は、益々行き詰りを感じて、何も書けなくなつて来るが、頭を青空の如うに空ろにして、何にもとらはれないでゐると、却つて思ひがけない所に詩を見出すものである。

隣家の一坪半ばかりの小さな池も、何心なく覗けば、朝の水は清く澄んでゐた。そして水面はハツ手の緑葉が一枚浮んで居た。たぶん子供の仕事であらうけれど、その一枚のハツ手の葉の緑と澄んだ水の澄け合は、何とも云へない美しさであつた。その水の中に鯉が二匹、蒼黒い體を洗ひて、いんらが朱を含んだ鱗のみを靜かに動かしてゐた。一つは二十吋、他は十三吋とも思はれる。大きなさである。尚よく水底を見つめると、小石と泥の中にびつたりと身をつけて首を引込めたスワポンもあるではないか。何かまだ夢でも見續けてゐるやうである。あゝ、こんな所にも繪があり詩があつたと、ひとり悦んだことである。

藝術にも宗教にも餘りに振はれずに、收容所や戦争にも餘りこだはらずに、そして生にも死にも大して執はれず、無涯の廣野を、何の行詰りをも感ぜずに歩み行くやうな心境になりたいものである。

一九四四 五月末 記す





随  
想とらはれぬころ

外川明

いと思ひ立つて、舊家の先祖代々の霊と、この國で死んだ義父と義妹の霊を  
吊ふべく、石原開教師に御願ひに行つた私は、五月は何か私ヒとつて不思議な  
因縁のある月のやうに思はれなりません。家内の父が十七日に亡くなり、義妹  
が死んだのが十九日、その同じ日に私達が結婚して居り、弟が生れたのも五日。  
と話しかけたら、その話を全部聞き終らぬうちに、一念を集れば念は念を呼ん  
で益々さうした事を考へるやうになるから成可くさうしたところに捉はれぬ方  
が良いです」とおつさり説いて下さつた。

さうだ、餘り事物に捉はれぬことが大切だ。暗い心の影を追つて、暗いこと  
のみを考へてみると、心は益々暗くなつて来る。五月を私の憂鬱の月を想へば  
尚更憂鬱になつて来る。それは恰度、ヘイファイバーに罹つた者が、そのことに  
のみ捉はれてゐると、餘計にも鼻の穴が痒くなつて来て痒いすつたり、嚏をし  
たり、眠から鼻からも汁が出て来たりして、尚更苦しくなるのと同じことであ  
る。つまりぬことにこだはらずに、五月の憂鬱は、ひねもす吹きまゐる青嵐の



きい鯉が上つて来た。「此處は可なり釣れます」と老爺は僕の後背に腰を下して煙草を喫ひ出した。けれど一人が竿を出し得るだけの場所だから、山さんは唯見物して居るばかりである。間もなく又一尾釣り上げると、山さんは、

『若い者は上手だのー』と云つた。

『だめだよ』

『いやそうではない』

『これでも上手の中かねー』

『この谷川へ時々釣りに来る者の中でヤングが一番だ』と大いにほめそやす。

『何しろ道具が良い』と言つたので、

『それでは僕は上手でなくして道具が釣るのだね、アハ……』と笑つた。

山さんはすぐ、『いや、それは誰だつて……』と云います。いくら上手な人で

道具が悪いと十尾釣れる所は五尾も釣れません。

それから二人は種々な談話をして居る中に鯉意になり、山さんが遠慮なく言ふ處によると僕が見つけた場所は山さんの、おじと、の一つで足場も山さんが作つたとの事、町から人が来て連れて行くと云ふから一緒に来ると下手の癖に釣れないと怒つて直ぐに止す事、釣れないと言つて怒る奴が馬鹿だと言ふ事、町から来る人には斯ういふ氣短が多い事、魚でも生命は惜しいと言ふ事等であつた。





# 魚釣リ

病後日記より

小西里江

青春の向學心捨てがたく、A市でスクールボーイをして苦學難行して居た時分の事である。フトした風邪からとろく一學期フイにした事があつた。田舎に居る叔父が心配して養生旁々遊びに來いと云ふてくれたので、一夏そこへ危介になつた。

或る日の午後僕は溪川へ鯉釣りに出かけた。暫く川を遡つて行くと、後背の崖から川柳の枝は被ひかぶり前は可なり廣い瀬が靜かに渦いて流れて居る釣リにはもつてまいといふ場所へ出た。足場はあざ／＼作つた様に思はれる程工合は良い。此處なら釣れないでも半日位は辛抱が出来ると思つた。處が釣リ始めると間もなく背後から、『釣れますか』と聲を掛けた者がある。それが『山さん』と後で知つた老翁であつた。名は山城と云つた。七十近い背の高い骨太の老人で矢張り釣竿も持つて居る。

『今始めただばかりです』と云ふうち浮木がグツと沈んだから上げると可成り大



嘗つて山さんと一緒に辨當を食べた事がある。平い岩まで来ると、疲れたので一寸腰を下した。もとより釣る氣はない。岩の上に立つてぢつとして居ると寂しいこと、静かなこと、深谷の氣が身に迫つて来る。

暫くするとGパスへ越す峻嶺から雨は吹き下ろして来た。霧のやうな雨が斜に僕を掠めて飛ぶ。すぐ頭の上の禿山を灰色の雲が切れ／＼になつて駈る。『山さん』と僕は思はず、涙聲で叫んだ。両眼からは涙は止めどもなく落ちた。

(これはずうと以前に、何かを見て書いた、日記の一部であるが、今でも河へ鯉釣りに行くごとに山さんの事がすぐ頭に浮んで来る。)

(配所の鯉月三十頁より)

李太白は感慨して歌ふ。

青天月ありてよりこの方幾時ぞ、

我今杯を停めん一度此これに問ふ。

人の明月を攀づる得べからず、

月は行いて却て人と相したがる。

今の人は古時の月を見がりが、今の月は曾て古人を照したりき、誠に月は昔も変らず、永久無辺に情趣深々として盡きないものです。

(昭和十七年十月六日、コロラド、タイムスに投ぜし旧稿)



その日はそれで別れ、其の後は互に誘ひ合つて釣りに出かけて居たが山さんの家は一室<sup>ま</sup>しかない古い小屋で、叔父さんの畠のしもにあつて其處へ獨りでわびしげに住んで居たのである。何でも無遠慮に話す老人だが身の上の事は成るべく避けて言はない様にしてゐた。けれど遠まはしに聞き出した處によると以前にスタクトンに居た人で、忤<sup>た</sup>吏婦は百性をして可なり<sup>なり</sup>の生活をして居るが、其吏婦の忤<sup>た</sup>打は氣に喰はぬと云ふ、もう数年来一人で此處に住んで居るらしい。それで忤<sup>た</sup>から食ふだけの忤<sup>た</sup>送りをして貰つて居る様子であつた。成程さう云へば何處か固<sup>がた</sup>拘<sup>こ</sup>のところもあるが、僕の思ふには最初頑固で行つたのが、後には却つて孤獨<sup>こどく</sup>のわび住いが氣樂になつて来たのではあるまいか。世を遁れた人の趣があるのは其の理由であらう。

秋口は立つて病氣もすつかり良くなつたので山さんに別れを告げ、叔父さん一家に見送られて再び市への歸路についた。これが山さんの最後の別れであつた。

翌年の夏休みに行つて見ると山さんは居ない。去年の末日日本へ歸つて亡くなつたとの事である。

「雨が降りさうだから」と叔母さんが留るのも聞かず、竿に道具とブーツを借りて出かけた。人家を離れて少し<sup>さうば</sup>沚<sup>し</sup>ると既に路もなければ畠もない。只左右の断崖と其の間を迂<sup>う</sup>回り流れる溪川ばかりである。瀬を辿つて奥へくと沚<sup>し</sup>に連れて此處彼處曾遊の瀬の小蔭には山さんの姿が見へるやうである。



實に美しい技巧の持主であつた。戀愛はその理想に於ては絶對的であるが、實際生活としては相對的になり易いのである。けれども早れがために戀愛價値を低下するものではない。サムソンは眞の戀愛に生きんとしたのであつて個々の女性には彼にとりては目的に對する過程であつたかも知れない。同時に彼女等の何れもが男性としての彼を過すること一個の生活様式として安全地帯を探したやうなものであつた。

低級な當時の倫理生活を通じて記された戀愛觀は、今日より見て文化ある相違して居るが實に興味ある記録である。野合に等しき男女の生活を合理化し戀愛の永遠性を説いてゐる。野獸にも似た元始生活に宗教の理想を入れ、民族興亡の秋、戀に失敗し敵國人として賣られた彼、今日の男性と何等變ることなきサムソンと自己の世界を創造せんとするデリラ、不道德でもあり、無道德者ともなつた女性デリラ、民族愛のために愛人サムソンを賣る彼女の生活も今日より見ては興味ある問題である。サムソンは神にありて強く、人としては弱き存在であつた。

終

。選み編まれた小さい文庫の中に、如何に大きな富があることだらう！（エマース）  
。藝術は人々を合一せしむる手段の一つである。（トルストイ）



# 民族愛と戀愛 深田敬

サムソンの横顔

シシ記は史的記録と云ふよりは、一つの元始種族の宗教觀であつて、被征服民族の信仰詩である。したがつてサムソンとデリラの記事も當時の種族間の鬭争を背景として抽出されたもので、彼のサムソンが民族興亡の危機に立ち敵國人の女デリラを愛し遂に賣られるのである。愛慾はそれ自ら目的遂行のためには、社會制度も民族も忘れて凡てのものを破壊すると云はれた如く、野人そのまゝ荒削りのサムソンも、デリラを愛し彼の女の前には従順な小羊であつた。

「汝われを欺くこと三次汝の心われになし、いかでわれを愛するぞ」と曰ひ彼をせめたれば、サムソン死ぬるが如く苦しむとある。真に彼はデリラを愛し彼女なくては生き得られなかつたのであつた。

男らしい男として強き彼も、彼女の前には弱々しい心の持ち主となつたのである。デリラは彼には第三の女であつた。妻に失敗した彼は遊女に通ひ、満し得ぬ心の痛手をデリラによりて癒したのであつた。

男一匹の純情、子羊の如き従順な彼を塵芥の如く銀千枚のために棄てた彼女は



甘く中つた形容は俗だが正解は設計だ、正面と平面の三分の一弱のところを  
ねらつた観点、それが美しい繪だ。文も詩も繪も、こゝらあたりをねらつたと  
ころに妙味が出てくるらしい。

床しさがあるとか、ぼかしてゐるとか、餘韻があるとか、「いゝね」など、柔  
く響く言葉が出てくるのは、將にこのあたりを中心にして動いた、筆や舌や腕や  
心であるまいか。前に云つたやうに、私は、文藝のテクニクを知らない。  
しかし、味ふ心持だけはあるらしい。どうか、文藝に、たづさわられる諸先輩  
が、御精進下さつて、真理の二十三度十六分觀を、誌上に書いてほしい。

真理の正面圖、平面圖、横断面圖を詳に、知つた上でこれを二十三度に觀る  
のと、皆目それを知らず、小器用にスケツクだけでやるのとは、作品の奥行き  
が違ふことは勿論だ。良寛和尚……、藝術に透じた和尚の言行は、私共の精  
進……生活……に、大きな暗示を與へる。和尚の好きな三つとときらいな三  
つを讀んで味ふてみると、教へられることが多い。私は良寛に耳を傾ける一人だ。  
(終六、一四)

○朝は冬午前は春で午後は夏 四季一日のポストンの秋  
○わび住の小路はほこりと穴だらけ、之が我家が泣こはれる

《瑞海作》





## 私のおがひ

山 永天 涙

私は文藝には縁の無い男である。文藝誌に投書した事もない。またそんな  
持は更にもたない。たゞ『文藝の範圍を超へて、何かのためになるものを書い  
て見ろ』との御注文があつたので、不向きな素人であることを、よく知りなが  
らペンを走らせてみる。

文藝と云ふものは、美を生命とするもので、而も、その美の表現が、その最  
高潮に達した所に、文藝の精があり華があると思ふ。

凡そ物の美の頂点は、三十二度十六分の角度から觀た時だと、記憶して居る。  
そんなことから推して文藝と云ふものは、自然を二十三度十六分の角度から觀  
た。巧な表現なら、良いだろうと思ふ。

『甘く中つた形容が俗で、旨く中らなかつた形容が詩で、まづくて中らない  
のが哲學だ』と甲斐さんと藤尾と宗近君に言はせた漱石の言葉は面白い。



満月皎々と連峰に輝やく情趣　此時に觸れ殆んど堪へ難き感念想に咽ぶ場合が多いのですが、その中に去る九月五日土曜日（昭和七年）の宵は恰も三ヶ月であり、其日は午前八時頃館前よりミスケットの森に唯一人散歩がてら入りたる或る人の帰らざる為、午後は我々のブラツクの人々は總掛りで森深く川の底まで尋ね探りましたが見出すに至らずして遂に闇は襲ひかゝる夕となりました。あの人は梢も動かぬこの森の何處に今惱みつゝ或は既に倒れて居るのであるかと、憂鬱鬱こもる黄昏の將に眠らんとする森と林を眺むる時しも、鋭き弦月が音もなく空に顯はれたのです、森は愈々静寂の影を増し、月は益々深沈の色を漂はす、噫、斯の森と月、一生再び觀ることの出来ない對照であつたかと想ふのです。

私は何故か、三ヶ月を觀れば杜鵑を連想し、満月に對しては何時でも嵯峨野を偲ぶのが常習なのです。それは平家物語の小督の弓を回顧するからでせう。

仲秋満月の夜に彈正の大弼仲國が恩賜の駒に鞭を揚げ、薄の稜風にやうぐ嵯峨野に急ぎ、廣き野原を駆け廻り美女小督を尋ねあぐみ、とある松の樹蔭に駒を停めて無心に満月を望みながら一息いれて居ると、かすかに琴の音が聴えて来たのです。『峯の嵐か松風か、尋ねる人の琴の音から』やをう駒の手綱引きしめて琴の音を便りに進むと、苟も斯の夕月に主上を慕ひ参らせて、茅屋の縁側に琴を弾いて居るのです。しかも其曲たるや想夫憐といふのです。斯しも都の宮殿、九重の雲深きあたりには美女小督なきため、思慕の御情やう瀨なくつく



隨

筆配所の觀月

長谷川生



飯む連山に懸々たる私は月をも又無上に愛するのです。山は光線の工合と雲の浮遊むによつて其の色彩と趣とを異にすれど常に動かず存在するのですが、月は或は夜に限り、又それを見得る時に限りがあり、しかも連續して姿を現はす場合には盈満其の容を異にするのです。

何處より見ても清麗なるは實に月であり、又其容に於ても三ヶ月よし半輪の月可なり満月を欣ばぬ人とはないのでせう。そうして高塔に隠れんとする弓張り月、森林の枯枝に懸る弦月、熟れ落ちぬ情趣に富むのです。

月も觀る人により異なるのは勿論ですが、慨して都の月よりも山村魚里若くは廣き荒野の月に一層趣の深きものがあり、又望月の欠けたることもし、と詠じたる驕奢絶頂の藤原道長よりも、三笠の山に出でし月かも、望郷の念禁じ難き客倍仲鷹が月に對する感懷の痛烈なりしものがあつたようです。

私はホストンに移住してから晝間は山を友とし、漸く悲哀の情遍らんとする夕は沙漠の月に慰められて居るのです。粗造の館舎の淋しく眠る軒並を靜に照す弦月。





居外 城江松

# 小泉八雲を語る

土屋 天眠

ラアカデイト、ハーシと云へば、歐米の文學界は勿論、文藝に興味を有する一般社會に於ても、誰一人其の名を知らぬ者なき迄に、盛名を歌はれた、天才的文豪であり、又文藝批評家としても、他人の追隨を宥さぬだけの、思想と學識と才筆の持ち主で有つた事は、掩ふ可からざる事實である。

而して彼は愛蘭人の父と、希臘人の母との間に生れ、愛蘭に於て成長し、佛國に學び、米國に於て成人したが、別に是れと云ふ肩書や、最高學府の閥歴なども持つて居る譯でもなく、只單にハーバース出版會社派遣の、一通信員と云ふ資格で、日頃憧れの日本に渡航し、是れが機縁となつて、遂に正式に日本に帰化し、松江の旧藩士の女某と結婚し日本名を小泉八雲と改稱し、其の始め熊本第五高や、松江中學校に英語教師として、教鞭を執つて居たが、其の當時の帝大總長外山正一博士の知遇を受け、同博士推薦の下に、招聘されて帝大文科英文科講師として就職し、十年の歳月を同講座に費し、文藝批評家として、彼れが得意の壇上たる、獨特の鑑賞眼に映じた、純然たる主觀的にし



と唯斯の明月を眺めくらして居給ふ、やんごとなき方があつた筈なのです。

名月と謂はゞその昔太宰府の法皇公をも偲ぶのです。

去年今夜待清涼

秋思詩篇獨斷腸

恩賜御衣猶在茲

捧持毎日拜餘香

その頃では大和の國の絶域、筑紫のはてに罪なき否寧ろ國家に勲功輝く身を有とながら配所に故郷の京都を偲び、ありし日の高貴の恩寵に紅涙を灑いで禁じ得なかつたのも斯の月に思を寄せたからであつたのです。

歴史は語る、新羅三郎義光が足柄山の山嶺に蕭條たる秋風に吹かれつゝ指を敷かせて恩師の子息と生別死別を兼ねて笙の笛の秘曲を吹奏したのも斯の名月の下であつたのです。

尚明治維新の英雄西郷南州が傑僧月照と憂國の壮志を抱き乍ら共に相携へて清青たる薩摩瀾に投身したるも矢張り曇りなき斯の満月に照されての事であつたのです。

張若虚は追憶して賦す。

江畔何人か、初めて月を見しや、

江月何れの年か、初めて人を照せし、

人生代々窮り己む無く、

江月年々望み相似たり。

(第二十三頁(續))



肆より出版され、英米の讀書界より、好評噴々の聲を以て迎へられ、洛陽の紙價を高らしめしと云ふ。之に對しても吾人として卒直に言はしむれば、何故に其の本家本元たる日本に於て、邦人の手に依つて出版せざりしか。此点吾人の甚だ理解に苦しむ處である。

今や彼八雲の遺骨は、東京府下雜司ヶ谷なる、天竺宗の一寺院、自澄院の墓地に葬られて、永遠の眠りに就ているが、英文界に於ける巨匠として、將亦た時代の文藝批評家として、實名を天下に馳せし而已ならず。日本の文物を世界萬國に紹介したる一人物として、赫赫たる偉名を後世に遺したる、彼れ小泉八雲の英靈よ、天地と共に永へに安穩なれ。

因に八雲傳及び尺牘集は、エリサベス嬢の麗筆により、上梓して讀書界に公にされていゝと云ふ。

終

### 『教育管見』の續き第三頁より

生活である、餘程母親はしつかりして欲しい。

### △環境の影響！

の大なる事は彼の『血母三遷』にて言ひ盡してゐる。日本民族のみ

が集團となつてゐるキャンプ生活は言はゞ民族試練の好機會を與へられたと言つてよからう。吾人は日本民族の一員として社會人の一員として當然兒童の行跡上の責任の分擔を負はねばならぬ。言葉を代へておふならば兒童教育は一家庭、一教會、一社會人、之等が相協力して始めて達成されるものであらう。

(以下次掲)



て、又獨創的なる文藝批評に、畢生の努力を傾注し、主として情緒の表現、人生の描寫に厚身の熱意を濺ぎ、一般聴講生達の信頼を博して居たが、後年故あつて其の職を辞し、閑雲野鶴を友とする、高踏優越の境地に就いて居たが、這般の消息に就ては、一片同情に値ひすべきものなきに非ず。

猶彼れ八雲は大學講師として其の餘暇を利用し、彼が天分豊かなる麗筆を揮つて、日本雜錄、骨董、日本瞥見錄、影、東方より、日本と其解釋、其他佛陀拾遺、怪談等幾多の書物に筆を染め、彼れが衷心より日本を愛し、日本の朝野を信ずる立場より、日本の國土、山川、草木、人情、風族の美を讃へて、之を海外諸國に紹介すべく、力を盡した事や、或は又彼が擔當してゐた、英文講座の中より、幾多の俊豪を輩出せしめし事など、枚舉に遑あらず、斯く彼が遺した功績の顯著なるもの多々あるに係らず、本邦人の是に報ゆる所甚だ尠なりし觀あるは、千秋の恨事とする處である。

然れど日本の國家は、彼が生前の功績の偉大なるを嘉稱し、追贈するに從四位を以てしたるにより、地下に安眠せる彼八雲の靈も、聊か以て慰むる處ありしなうんと信ず。

又彼が英文講座擔任中、十年の歲月を費し、全身の心を濺いで、研鑽、考究を遂げたる結晶として、後生に遺されたる講義録は、聴講生の筆記を基礎とし、北米合衆國コロンビヤ大學、英文科教授アスキンス校訂の下に、紐育の書



名前もレロケーションオフィスと改稱してプロジェクト、アドミニステレーションを聘<sup>ひらぎ</sup>聘して居るものゝ様である。

W.R.Aの政策はとりもたず政府の方針であらうから、凡百の排日屋の盲動も又議會軍部の反對的聲明もやがては合流する事にならう。殊に戦時は命令の一文化を必要とする事は、デモクラシー國家でも変りはあるまいから。さて本筋の再轉任も昨年の初夏頃からと記憶するから、もう一年を超へた今日迄は大体シカゴ・クリーブランド、シンシナチー等の大都市の工場へ若い者をバラ／＼送りをして様だ。ホステールの完備や各地の二重稱讚ニュースを寫真入りで各處に貼り出されてゐるのをよく見たが、これも若いものだけへの魅力らしく、大きな家族を抱へた一世には雲上の物語りといふ響かないといふ噂も耳にする。又農業を中心とする此處の人口を減らすには何か他の方法を講ずるのであるまいかといふ觀側も必然的な様である。それにこの春以来イツケス内務長官や、マイヤー轉任局長の加州入り及びデモクラシーを背景としての彼等の強い辯護は何者かを示唆するものゝ如くである。一年を三百六十五日働き通せる天恵は、裸の日系人には既往の因縁關係を棒引きにしても最上の轉任地の様だし、排日屋がいくらはやし立て、も、日系人を一番よく知る沿岸の人々はニュージャシーの、山本事件の愚態は演じまい。何時加州への道が開かれるか、それが昨今の木蔭の懇話の中心の様だし、又先聲隊として軍人家族の戸籍調べがあつたとか。





データーポレ

# 轉住の行方

ロイ・タザワ

ホストンは住みよい處となつた。キヤスターピンズ、柳、ポアラ、ガムツリー等におほわれた森の都となつて、疾風強風につき添ふた砂埃の惱みも急角度にくすらいだ感がある。それに滿ニケ年余のキヤンプ生活経験はすつかり住民をキヤンプ人に仕上げて仕舞つて、メスホールを覗いても、バラツクをうかがつても秩序整然と水際立つた器用さを見せて居る。轉住當初の二世萬能政策が十一月事件（千九百四十二年十月十八日から十月二十五日）と二世志願兵問題（市民協會の決議）を轉機として一世二世併用政策に轉向され、それに再轉住と徴兵が拍車をかけて何處も彼處も人手足らずに悩んで居る。沙婆同様にマンパワーコミンヨン等といふいかめしい役も出来た様だが、それだけに何處も彼處も、我等のキヤンプの感が深い。

斯うした時にW. R. A. が再轉住を本腰に乗り出して来た。勿論エムプロイメントオフィスの片隅に居候同様のリープオフィスが郵便局隣りのエキスプレスを逐出して、一人前のオフィスも構へてからは、時代の子として日に日に肥り出し、本年に入つてからは



はしたバーヴドワイヤーの柵外には決して出ない。主人が許された範囲内の監禁所規約を自うもえを奉じてゐるかの様に思はれた。朝夕鳴き渡る村鳥の誘惑にも迷はず頗る冷やかば態度で應接してゐた。腹が空くと主人の頭や肩に止まつて『グーグー』と濁つた聲を立て、餌を要求する。栗田君は腕に止まらせて『ジャツキ、ハングリーカー！』と問へば鳥は『グーグー』と言ふ。そしてヒナの時口付けしてミルクを與へられた習慣が忘れられず、成人となつても嘴を主人の口の内に何時迄も入れては『グーグー』と云ふ。栗田君は此處、頗る得意であつた。

『三歳の児童の根性百歳迄』との諺は教育上由々敷重大性があると思ふ。而して栗田君以外の人の口には決して嘴は入れぬ。

### △善悪の識別！

鳥が成長するに従つて悪戯をする程度も段々と深刻となつて来た。他人の万年筆や木筆を啣へて来ては主人のベッドの上に置いてゐる事も度々ある。クラッカーやクッキークの箱を咬き破つては食ふ事もある。栗田君はそんな訴へを聞く毎に、見る毎に鳥の嘴を爪彈きしては、『バーグード！』と言つて懲罰と訓戒を加へた。此んな事が度重なるに従ひ、自然悪い事だと思ひ識したのである。『ジャツキ！』と言つて爪彈きの型をする。『グーグー』と言つて頭を垂れる。其の態度は『悪』かつたから勘忍して下さい』と言ふ心持ちが十分に汲み取らるゝ。



欄庭家

## 教育管見

有田 百

筆者が一昨年ロースバーク監禁所に收容されてゐた時の事である。同收容所にはアラスカ同胞全部も同じ運命に依りて其處にゐた。其のアラスカ同胞の内頭髪を逢々と生やした栗田常次郎君、俗名「鳥の親父」がゐた。丁度筆者のバラック近くにゐたので自然友交關係が結ばれるに到つた。此のアラスカ君は目も明かぬ鳥の雛ニ羽を傷きに來てゐたメキシコ人から貰つた。貰つた者も至つて愛りに違ひなかつたか、尤も配所の無聊が然らしめたであらう。

## △三歳兒の記憶と習性！

栗田君はマスホールからミルクを貰つて來ては、自ら之を口に含んで雛鳥に飲ました。幾日か経てパツチリと丸い目を開いた雛鳥は栗田君を見ては極度に嘴を開き餌を要求する様になつた。栗田君は約二十分間毎に米粒大に牛肉を切つては與へてゐた。

斯くして段々と成育した鳥にジャワキと名付け他にメリーと命名した。巢立ちをした鳥の時は自分のベツドのある窓の外に造つてやつた。千里續くてふ茫漠たる沙漠の大空を悠々と飛翔する様になつた鳥は、不思議にも嚴めしく張り廻



〔栗田常次郎氏は一九四二年三月、サンタフナーに移り更に五月二十三日一行二百名と共にサンタフナーを出発してアイダホのルスキムキャンプに行った。無論愛兒鳥も同伴であつたが鳥は馴れぬ始めての土地で何か食の中毒で三日間許り病氣して六月十日二羽共病死したと云ふ。栗田君は當分憂鬱症状態だつたと云ふ。筆者は鳥兄妹の死を哀惜する。〕

右は一行の書記であつた。三一區門浴受人氏の報告である。〕

### △親の責任！

サクラメント市の筆者の友人の一人に十何年振りにか一人の息子が生れた。それこそ子寶が無いものと思ひ込んでゐたのであるから逆も喜んだ。其子が四歳でしたか幼稚園に行く事になつた。偕て父親は熊本人が持つ特異性を極端に榮揚して「喧嘩して負けてなるもんか」ステキで頭をウツケクラフシて来い」と飛でもない激勵をする。家庭にあつては竹刀を持たせて如何にして撲つかを實現する。筆者でも訪問すると此の小冠者は突然「オメン／＼」と言つて打つてかゝる事が度々であつた。父親が或る日昂然として言つた。「今日は二人を泣かした。今日は四人泣かした。とこれがいふ（息子を指す）偉いモンタイ。屢が今日學校の先生が来て、『餘りにも乱暴だから家庭に於ても充分注意と訓戒をして欲しい』と言つて来た。中々に此がキはヤルバイ』。とさも手柄顔に宣傳する父親の態度を傍で見聞きする子供、之が白紙の如き純心なる子供の精神に與ふる影響はどんなであらうか。誠に寒心に堪へない次第である。

（第三十三頁へ續く）



子供に善と惡との識別をはつきりと教へる事の如何に大切なるかが、これでも窺はれる。

**△褒めて教へる事う大切!**

栗田君は鳥に釘抜きを教へた。先づ大きな釘を鳥に見せて之を地に突き立て、「之を抜きプール／＼」と言つては引抜く所作をする。これ共無論二羽の鳥は何事ならんと思議相に見守つてゐる。栗田君は遂に自らの口に釘を啣へて「ウン／＼」と言ひつゝ四五度で抜き取つた。「シ、ジャツキ! ツライ!」と言つては釘を引き抜く眞似をして見せる。そして鳥の背を撫で、勞る。斯くする事四五度に及んで鳥は遂に地上に突き立つてゐる釘を抜き事を覺へた。其の上五寸釘で中々に骨折る時は嘴で釘の根本を掘つては引抜く工夫さへする。栗田君は其度口を極めて褒めては背を撫でる。鳥は一瞬で得意になつて更に何事か成さんとする熱心さが向上する。栗田君は小指大の小石を砂に埋めて「之れを掘れ! ジャツキ!」と指さすが始めの内は知らぬ半兵衛を極め込んでゐた。栗田君は小石を掘つては鳥に見せ又埋めては探す眞似をしてゐたが、後には教へられた通りにするやうになつた。而も先づ五個の小石を彼等に見せて地中に埋めれば、其五個を掘り出して其上探しやうとはせぬ。十個を見せて地中に埋めれば、セツセと其十個だけを探し出して更に疑惑に陥らぬ。之を以て是を見る時に各自が持つ潜在知識は先づ教へ導く事に依つて如何やうにも啓蒙さるゝ事が立証さるる。



あゝ可憐な甘諸の夢ツルよ！

お前は伸びてゐるけれど

それ以上伸びてはいけない

お前の周囲を見てごらん

餘りに殺風景ではないか

お前がいくら伸びても

からみつく可き物は一つもないのびよ

そして伸びれば伸びるほど

煩悶しなければならぬお前だのに

お前はどうしても伸びやうとするのか。

私は伸びてゆくその夢を見るのが辛いので

え、いつそのこと切つてゐると思つて

理性の鉄を取り出したが

さて切るには餘りに惜しい

可愛い甘諸の細夢ツルよ！

(或部落の食堂で甘諸の夢を美しく伸ばしてゐるを觀て一寸懷しく感じたので、  
十七八年以前に作うた古い詩を再び發表する氣になつた譯です。)





## 甘諸の蔓

あきら

綺麗な甘諸の花が伸びてゐます  
細い軟らかい浅緑色の蔓なのです  
小さなゼエリーカップに入れて  
さも窮屈さうに生きてゐる  
一つの甘諸の運命を  
私は今ひとり凝視てゐるのです

私はこの甘諸がたまらなく可哀想だと思ふけれど  
そして自分が彼にかうした運命を  
喫へた事を済まないとも思ふけれど  
甘諸はさも悦ばしさに  
真白な根をカップの中の水に下し  
また縁の夢を上へ上へと伸ばして  
名も知らぬものへの憧憬に向つてゆく



# 生活断章

花信木刀雜篇

片井溪富子

アワユキノハレマニハ

寂シイ地ノ芽ヲ出シタ

鬱金ノダホデリーガ

ホツリくト咲イテ

ココカラハロツキーノ展望

タツタ園ヒノ内外デ

メグルマシイ戦波ニ棄ツタ

ヒタシキ同胞ガ

互ニ両極端ヲ行カウトスル

空前ノ惱ミト悶ヒ

ハヤク心境ヲ研ギ澄シ

ミシナガ欲スルママニ  
勇猛ニ立上ガルコト

雀カサナツテ落ケル  
ウヅキノ数影ヲ覗ク

オチツカナイ再轉住ノ  
思ヒ直シ考ヘナホシテハ

ケフモマタ

ドロテデ汗ヲ拭ヒテル

ロビンハ暮サレテ

マダ鳴イテキル雪明リ

二六四・四・二四シグル、夜。





# 南海の靈

土屋天眠

闇夜の 風に誘はれて

南の洋の 彼方より

傳ふる聲の 凄まじき

叫びは何んぞ ますらを 大丈夫が

祖國に捧げし 魂魄の

末期の叫び 君知る哉。

鍛へ鍛へし 心膽の

如何で怯まふ 筈やある

今は最後の 奉公と

祖國に捧げし 大大丈夫が

惜ら生命の 消えて行く

悲壯の場面 君視す哉。

國家の 危急存亡と

父母眷族の 安否とを

擔ふて起てる 大大丈夫が

祖國に捧げし 犠牲の

譽れは高く 輝きて

千代萬代に 馨るらむ。



再び逢ふ日のある日をうたがはず遠く行く君の幸をし祈る(安富夫人)

清時文子

戦場にたゝかひつ、もつはものは母戀ひをらむ母の曰今日は  
故里に吾とし待つとふ母を思ひ母の曰今日も暮れゆかむとす  
母我に吾子の贈り来し衣見れば武骨なる彼のよくもとらびし

鈴木緑松

水淀むコロラド河のかはの面に夕映えの空と山がうつれり  
菜の畑中飛立ゆきし黒鳥等二列に並び電線に啼く  
見送りの歌詠をすべは知らねども君が門出を祝ひしるさむ

鷓鴣湖綾織謙介

アバロニ山の南に出し日此の頃を北に廻りて野は青み来ぬ  
春の日の没りてなほのこる夕光のかき野べに鳥鳴きやまず  
立退きと共に債務の責なしといふ見解を人怪まず

児玉なま

おのづから芽生えし李わが庭に稚きが五本嫩葉萌えつ、  
月明き庭に停ずみすがすがし夜目にも白く花の飛ぶ見ゆ  
アスパラの料理を今日はいたゞきぬ愛しきものに吾は遇ひしがに  
いつの日か邦人らこそぞりて出所する遂の日のなしと誰いはめやも(或時)



永瀬勇力選

# ポストン歌壇

文藝者協會皐月歌會詠草集

五月二十八日催ス  
順序不同

貴家 志ま子

ふたとせをここに耐え来しまも我も白髪殖えつゝ老い著きかも  
暗の道にいさなる火の動けるは前行く人の煙草の火かも  
こゝの言葉如何に書かむかとなづみゐてペン先のインク乾き果てたり

大空 魁

キャン普生活二週年唱

弱き身がよくぞ耐えたり二年を病み臥しもせずここの砂漠に  
常の世にあらざるは知れざりながら心の焦り如何に押さへま  
ひもすがら嵐吹きつゝ閉ち切れる部屋の中さえ土埃にほふも

升谷 千代

ことごとく我のすべきまなし得たる思いする日は樂しかりけり  
つばらかに我が行く道を見て思ふいたく険しくはろけきこの道



者を得引續けて、『文藝』を當ポストンに在らせたいものだ」と東京西走して運動して下さつた結果、今回島原潮風氏、松原信雄氏、並びに有田百氏の奉仕的なる御同情を寄せられ、愈々六月より再び三氏の年によつて、『文藝』を刊行する事に決定成りたる由、誠に悦びに堪へぬ者である、就いては歌會の方も前述の様なエ合で前月は休會を餘儀無くされたが、再び今月から従前通り催ふす事になり、五月歌會と昨日(廿八日)午後二時より開催、然し未だ中には前述の結果を詳細に知られなかつた人もあつた為めか、出席者は誠に少なく歌會員の半数にも及ばなかつた、出席者は貴家 榊谷 児玉 猿渡 大空 鈴木 矢形 永瀬定之 諸氏と愚生の九名で、やゝ後れて川柳の島原氏が見え合計十名で聊淋しい思ひがせぬでもなかつた、けれども今回は特に猿渡 島原 永瀬定の三氏の出席を得た事は大変嬉しい事であつた、先きに川原夫人をクリスタル市へ送り次いで先日とは又安高氏をトレド市へと云ふ風に幾々と吾々の指導者の立場にある人を失つて一層寂しくなりつゝあつた、失先き斯ふした新人の末投を見た事は大いに力づけられた譯である、殊に永瀬君は既に廿年前北加桑港にあつた白線社(短歌結社)の同人たりし事あり、實力に於てもはるかに吾々の及ぶところではなく、實に好先輩を得たと心ひそかに喜び居る次第、今後は大いに啓發されて行く事を信じて疑はない者である、今回は少し歌會の進行の上に變化を加へん為め、貴家 児玉両氏に二首評を願つた譯で大へん有益だつたと思ふ。



矢形 溪山

醫務室の多忙を見ては病める身の訊き度き事も言はで歸りぬ  
息等の待つ市俄古え行くと其の母は旅の仕度にもすがらなり

永瀨 正臣

シヤスタデージーの花のみ未だ明らけし夕闇せまる友の門辺に

高原にプロロインデアンのためろなすアドベの家よまたと見ざるべし

瀨の音にこころ洗はるゝ朝（ササキト收書所より送達）や赦されて今日此處に来りし

永瀨 勇

安高氏送別茶話會席上記念品の端に各自一首づゝの歌を認む

人の前に筆もつ手もとうちふるひ拙なき文字のいやゆがみゆく

初夏の陽の光清らかに射せる下澄み極はまりて日照草赤さ

## 後記

矢形さんが市俄古方面へ轉出されると言ふ事で、今日まで約二年の間續けて  
来た吾々文藝協會の雜誌、『文藝』の發行の上に大きな支障を来たす事になつた。  
折角今日迄殆んど自分の腕一本で築き上げて来た、『文藝』を自分の轉出と共に  
に廢刊とする事は實に残念だと云ふ氏のお心持ちから、何とかして適當なる後継



から其辺は悪しからず御諒承を願ひて置く。

△追はれ来しその頃はひはこのあたり 見張りの兵士たゞずみてゐし。

此の作は一種の説明歌に過ぎないと思ふ。祭するに作者は或る日キヤンプの或る方面へ遊びか用事かで行き、其處で追はれて来た頃の事を回顧して成ったものが此の歌であらう。係し作者は何と感じて詠んだのか、『見張りの兵士たゞずみてゐし』だけではまだ讀者には充分に解らない憾みがある。字面上での意味は解つても是だけでは前に言つた如く説明より外に何も無いと思ふ。又、『此のあたり』と言つたところなど作者自身には其れが何處と解つても諸君には眼に浮かんで来ない。つまりあまり抽象的で具象が足りなかつたのである。

△尾根をまし 高く繁りし柳の木 挿し植ゑたりしは去年の夏なり。

此の作では先づ『し』の重複がわずらはしく感じられる。例へば尾根をまし 高くしげりし柳の木 挿し植ゑたりし、はと方ふ『し』である。それから『尾根をまし』は意を成さぬ言ひ方だと思ふ。『尾根』とは山の峯と云ふ意であつて、作者は此の場合何か誤解して使用したのだらう。此の間違ひが無いにして、も此の作全体が説明に終つてゐると思ふ。『挿し植ゑたりしは去年の夏なり』が其れである。



柳本さんへもお願して置いたのだが不幸にして氏は微恙の爲め出席あらず残念であつた、御快愉の日の一日も早からむ事を祈る。二首評は今後も代りくお願して續けて行きたいと思ふ、此れは非常にお互ひの勉強にもなるし、又愚生一人の見方よりも異つた方面から同一作を研究批評すると云ふ事は大変興味があつて良いと思ふ。今迄は安高さんが居られて添削や選歌を受持つて頂いてゐたのだが、前にも中上げた如く氏はオハヨー州の方へ轉出されたので誰か其後任として適任者の見付かる迄に潜越ながら又愚生が其の役目をつとめねばならなくなつた、既に度々申上げた事で今更ら言ふ必要もないと思ふが、至つて茲オの私であるから何かと間違ひ多き事ばかり爲す事故、予め諸兄姉の諒解を求めて置きたく、尚間違つてるとお氣附きの点のあつた際は遠慮なく御叱正の上御教示も願いたいものである、聊か後記が長くなり貴重なる紙面を費やしたる事を諸兄姉に詫びつゝ此のペンを擱く次第である。

## 選後隨錄

前にも時々試みた事のあることで、中には大変参考になると言つて喜んで呉れた歌友もあつたから、又此の選後隨錄を書いて見ようと思ふ、採らなかつた作品に對して物を言ふのであるから、むしろ賞めるより、悪口の方が多くなる



ポストン俳壇雜詠

和氣湖月編

関 五 松

短夜やあす入營の 子の寢息

春惜しみ出<sup>い</sup>所<sup>で</sup>し女の 病むたより

大空に真鯉緋鯉の 跳ねあはつ

夏草を分けて水門 開きけり

水門の漏れ水涼し 小魚飛ぶ

農夫等の野遊仕度や 豚を割く

バービキューに豚割かれたり 若葉蔭

豚割ける庖刀の主 汗ばます

河端に愛する馳走や 胡瓜漬

糸瓜棚瓢伸び来て 絡みけり

へつま棚半塞きて 今朝の花

盗蟲にさゝれし老の 撰手かな

鮮かな盗蟲なりし 砂煙

吉里 竜耳

一部落あやめの花に 明けにけり

南風に流れて鮮<sup>や</sup>き 鯉幟

制札に二三人佇てり ピクニツク

(註これより北日系人へるべからずの立れあり)

牧客所に伸びし並木や 鯉幟

三世の子は逞しし鯉幟



△青ぐろき若葉が繁る唐胡麻の下びに添ひて芽生えし李。

上三句即ち唐胡麻の情景があまり詳しく説明され過ぎて、此の歌の主材である筈の『李』の情景は忘却された形である。是では『李』を主とするのか、『唐胡麻』を主とするのか。先づ其處から明瞭にしてかゝうねばならぬと思ふ。此處に詠まれてある事柄だけでは、何かも、どちらつかずの感で、つまり作者の感動の統一がまだとれてないのだと思ふ。『李』を詠むのなら『青ぐろき若葉が繁る』と言ふ唐胡麻の説明は必要だろう。此の説明があるが故に却つてこの作を力の無いものにしたと言つてもよい位だ。唐胡麻の事はあつさりと片付けて、感の中心を成したる、『李』の上に全力を注いで詠むべきだ。例へば『唐胡麻の下びの土に四五寸の。幹かゝげたる芽生えし李』とおふ風にである。勿論此れで完全とはおはないが、何を主材として詠まんとしてゐるかと言ふ事は一讀瞭然と判るであらう。李の描寫はまだ他に工ますればいろいろとあるであらう。終 畧評多謝五二九、永瀬 勇

◎こゝろよく我にはたらく仕事あれ それを仕遂げて死なむと思ふ。

◎『さばかりの事に死ぬるや』『さばかりの事に生くるや』 止せ止せ問答。

(石川啄木)



ポストン御壇

島原潮風選

古川柳句解

島原潮風

四月朔の紙上には都合で載せられなかつたから、今月はうんと書いて其の埋め合せをいたします。

○子はこたつ 親にはころが 所まで

句解 あい、今日は大雪だから寒いと云つて、子供達は家に引籠つて炬燵這入りをして居るに、親父は流石商賣柄として、さあ轉ぶ所迄はと、草鞋穿きで大雪中にも厭はず行商に出る、さても子供達が情弱、想いやられる。

○八朔の雪は 吾妻の 香爐峯

句解 八月朔日は吉原中の太夫格遊女が一般に白無垢を着飾り階上に並び立つて居る、其の白無垢の櫛ひを遠く見上げると、丁度積つた雪の様で實に美しく面白い眺めである、昔清少納言が宮中に於て大雪のお庭に積つた日、一條帝の中宮から、『香爐峰の雪はいかに』と仰せがあつた下、無言で立つてお



水の面をひよと覗きし 鹿の子かな

仕事の間憩ふ日蔭や 薄寒し

夜明け待つ川床寒し ピクニツク

舟繋ぐくさりに鍔や 柳絮とぶ

靱脱いで渡る浅瀬や 水温む

大河をすい／＼飛び 夏燕

故國より慰問醬油や 洗ひ輕

大石に溜る下水や 通し鴨

和氣湖月

白百合の活けられしかば 聖書繙く

民

## 謡 二上り新内

草木も しはるゝ 夏の日や

砂の 嵐も アリゾナの

收畧 キャンプの 監禁も

忘れまいぞや

エーマ大知民族の 吾が誇り

白百合や悪童佇てど 手と觸れず

陽に對ひ皆白百合は 花撞げ

黙祈のまじまや壇の 百合匂ふ

一ト鉢の百合の三輪 相背き

コロラドの 浦の襖や 青風

散水と絡へば再び蝶の庭

風誘ふ大河を渉る 揚羽かな

一ト間時速めてキャンプ 暮れ遅き

櫛田瑠為仙

里を 離れし あばら家に

しばし 塵の世 よそに見て

此所ホス トシの 後住居

ひそむ一ト時

エーマやがて花咲く 春を待つ



登樓して後の持て方はいい。

○いけへの 氣で腰えは よりに立ち

句解 大名などの腰えが神や狐を憑<sup>より</sup>らせて、お家の吉凶禍福其の他予言判断等とさせる役目に當る事がある。が、其際は丁度人身御供の關にでも當つた様な心持ちで、觀念して慎ましく唯命是水従ふと云ふ風に、おとなしく其の役目に當るものである。

○すがかきに 感陽宮に 灯がとぼり

句解 すがかき(消搖)とは和琴の素彈の事を云つたが、今は歌ならで三味線と掻き鳴らして、さんざみかす一種の鳴物<sup>なりもの</sup>名となつた。さて吉原の遊廊は實に廣大なもので、三千の美妓が晚景此の「すがかき」の音につれて万點の紅燈が點出される、所謂不夜城が現出されるのである。彼の感陽宮の夜の光景もさこそと想像される程の盛況である。感陽宮は支那の秦の始皇帝の宮殿で帝が三千の美姬を蓄へ、晚景はすがかきの音につれて萬點の紅燈を輝された不夜城のこと。

○なり平も 腰辨當で からころも



格子を上げさして後、御簾を高く捲き上げて中宮のお褒めに預かつた云ふが、彼は葦箔の香爐峰であつて、之は吉原の引手茶屋の簾を掲げて見る八潮の雪即ち吾妻の香爐峰と云ふべき面白い景物である。

○でんがくは 昔は目で見 今は喰ひ

句解 田樂と云ふと、只單にあれかと早合み込みする人もあるが、之れには二通りあつて、昔は之を目で見たものであつたが、今は食べる物となつて居る。と云ふのは昔は農夫の耕作の勞を慰めるために舞した舞樂であつた、後になつて一家の藝となりて、鎌倉室町の頃には田樂法師と云ふものがある、種々の樂器で拍子を取りながら踊つた舞樂の名で、之は主として見るものであつた、今は正しく田樂豆腐と云ふ、之は申す迄もなく人の食ふ物である、時世とは云へ心目を慰める所の精神的舞樂は名實共に忘れられて、口腹の慾を満たすべき物質的食料だけが残されたものよ。

○素一分の 威光でぎうと 西されけり

句解 吉原の遊客がたつた一分きりしか持ち合せが無い故、實際は非常に心細いのであるが、其の素一分の客が表面は堂々たる威勢を示して、技ま近う寄れなと威張りながらお呼び出しになる、實に大した豪勢振りであるがさて



○麴屋の 梅の花とは見たれども

句解 珍うしくも早咲きの梅の鉢が飾られて居る。是れは多分麴屋の麴室に入  
れて咲かせた。室咲きつ梅の花と見えるけれども、大層見事に花を著けてある  
宗任の『我が國の梅の花とは見たれども』の故事。

○水茶屋で世の人口を たばこにし

句解 水茶話には往來の人が變ろく来て休んで居て世間の人の評判をする。  
それが煙草を吸いながら、煙草を吸つて煙を立てると同様に、一口の端に  
上せて話に花を咲かせて居るのも面白い。

○あだぼれの 文に結びし 繩すだれ

句解 居酒屋 飯屋などに繩すだれが樹つて居るが、あれは丁度仇惚れの  
文の様のもので、中部で結んだまゝに放つて置かれるものである。

次回の川柳課題

『勤め』  
『不平』

青藤一流選  
岡田柳華選

締切 月 日  
締切 月 日



句解 葉平は高子との關係により京都を追はれて東下りをした。さて辨當持参で長旅をしたが、其の途次三河の八橋で「杜若」を見た時に、或る人から「おきつばた」の五文字を句の頭に置いて歌を詠めと言はれたので、「おきつばた」に「おきつばた」に「おきつばた」に「おきつばた」と詠んだ。人は其の歌を聞かぬはれが、感涙を流したが、其の涙でお辨當の乾飯を沾したとの事である。

### 奥州の 土にはあはぬ 紅葉あ

句解 奥州仙名の土地には適合せない紅葉が一本ある。と言ふのは仙名侯が我庭に移して吾身請けして愛玩しようとした、吉原の名妓高尾の事で彼は折角侯の熱誠に背いて其の意を得ず、遂に手打ちにされて死んだと云ふ悲劇が傳つて居る。紅葉が土地に合はぬ為枯れ朽ちたと云ふべきである。

### 。獨吟は 表八句で たばこにし。

句解 俳諧連句は二人で長句と短句を交互に連續して巻く、即ち綴るのが正式である。が、獨吟として一人で巻く事もある。一人であるから表八句、即ち初表として表八句の十七字、脇句十四字を一句として凡て八句、即ち初表八句を巻いて煙草を一服吸ふ一休みにするのである。



勝相撲集る聲や帽子の数 (佳)

屋外劇蚊を追ふ事も忘れて見  
蚊をいぶす煙集ひも何時か滅り

山 西 里 江

國策に添ふて集る古雜誌 (佳)

集つて住めば氣強い皮膚の色 (春)  
菜の花に集る蝶や蜂の群

藤 井 孫 六

壮行會野球でも帽子廻つてゐる (佳)  
へたマ桐影にもならぬ陽は眞上

勝話ベンチが並ぶ夕涼み (佳)  
嬉々としてお入つた鐘へ急ぐ子等

土 屋 天 眠

薄幸の人へ集る世の情け

萬人の譽望擔ふ徳の人  
戦局の情報毎に耳が寄り (秀)

脇 地 閑 水

珍品が来たキヤンテンは人集り (佳)

演藝會噂の女人を集せ

捨てた釘拾ひ集める移住會 (佳)

ガラワツチ貰へるキューポ拾ひたり

趣味なればこそ石塊もよせて見る (秀)

濱 口 苗 水

集つた場所へ時局の目が光り (秀)

笑劇に集る顔ははしやいで居 (佳)

ミ―テング欠伸御免の靴をはき (秀)

安 井 靜 女

集つて食ふ文の悠語り合ひ (佳)

釋放に集めるサイン足に豆 (佳)

立ち退きにこりて集めぬ事にきめ

新 屋 軟 葉

集まつたチーヤイ兵も負けぬ顔 (佳)

丸焼けに集る情寄附の高

投げた餌に集る鯉に子ははしやぎ (秀)

難 波 桂 馬

月末を忙がしきうに集金屋 (佳)



第四十三面ボストン川柳句會

課題「集」 島原潮風選

到着順

齋藤一流

集金に居留守を使ふ身 目 (佳)

前後策役員として集められ (客)

富田

集團に慣れて淋しい出所の身 (又)

食の休みを園を馬鹿話

ミーテング類で教へる頭数 (客)

関 五松

黒いカー去つて近所の人が集り (佳)

投げ込んだ子のパン屑へ集る魚

定連が集つた食後の涼み名

津村 汀村

ウエデング視線集る新夫婦

年藝品目と驚かす汗の跡 (秀)

時局下に集るデマへ信不信

速水白舟 (52)

集れば小言も出づる前後策 (秀)

春の宵ダンス氣遣床の母 (佳)

集金も十六町へ解へる (客)

阿崎真澄

集團の生活に慣れて覇氣も失せ佳 (客)

民族の視聴集めたカシノ線 (客)

政策と別に集る皮膚の色 (秀)

鶴湖つうろよくも集めた貝の殻

星野光葉

幼稚園親と集るひな祭り (佳)

犠牲者の心に集る人の情

寄附金の高へ世上の目が光り (佳)

吉里竜耳

投げた餌に集つて来る池の鯉

両親の愛を集めた娘の背丈 (佳)

ギャベージも集め肥らす豚の数

鈴木緑松



初歩添削講座

島原潮風

『夢』

関 五松

△夢占に母は朝から 浮かぬ顔

之でもよいが『沈み勝ち』の方がよい。

△通知状夢なれかしと 空頼み、

○通知状夢なれかしと 讀み直し。

△両方から笑ったや、の 夢のぞき、

○両方から笑ったや、の 夢だどり。

之で君の意も現はれたでせう。

津村 汀村

△夢路にも恍惚れる故郷の 櫻花

之は夢の題でなく櫻の題です。

○満開の櫻故郷の 夢に浮き、

とでもしたら夢の題になります。

藤井 孫六

△来る處まで来て亦も 明日の夢

○来る處迄来てからも 明日の夢。

△夢に見た句を有明の 窓で書く、

『書く』と終止段で切るのは文法上で川柳では『書き』と切字を使はない慣例となつてゐる。

△故郷を出て理想浮沈も 夢の過ぎ、

『夢の過ぎ』と云ふ終はずに『夢となり』。

△ともすればもつれ勝ちなる 柵の夢、

『柵の夢』ばかりでなく夢は兎角もつれ勝ちです。

△母に會ひ醒めて位牌に 説がて居る、

『説がて居る』とおつて終つてはいけないうしを合せ』と下五を言つておく方がよし。

△夢三昧月雪花を一夜に見、

『一夜に見』では三回に見る事になるので

『一眼に見』とすると夢となる。

堀田 瓢池

△前祝ひ夢判断を ぐやしがり、

之では三ツに切れて夢判断が間違つて前



集會へ来ずに文句のある男 (地)

見晴らしへ集つて来る顔なじみ

森岡泰山

集りは何時もおんなじ顔ばかり (佳)

花嫁の顔へ満堂の眼は集む

集め子等の奉仕へ禮が来る

北村子守

骨折りで集めた會議また流れ

何處からか集る夜半の猫の聲 (佳)

ポストンの秤を集めた腕くらべ (考)

谷本晩香

講堂へ集めた技工智慧競べ (考)

デマニース知りつゝ集る時節柄 (佳)

野外劇演集めて 草となり (佳)

河島次考

牧客所獨りで飛べぬのが残り (佳)

集めてる話の男 金魚い (客)

集まつた彌次に立つて漢語調 (考)

堀田瓢池 (6)

野外劇嬉々と集り犬も居る (佳)

集りに嬉れし一人の顔なじみ (佳)

不安心集る顔のビクニユース (佳)

松谷緑泉

集めては又送られる百部隊 (天)

子や孫を集め微笑を光の幸 (考)

世相難越えて集る理事の顔 (佳)

浪音

時局画は見逃し出来ぬチエを携り (考)

涼基助言集る へボ将棋 (佳)

暖かい心集る 文藝誌 (考)

軸

宣傳のよさを思はず 此の人出

後記 出所や何かで忙がしい中にも係は

らず、之だけ御授吟下さつた事を深

謝いたします。

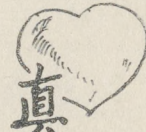
(潮風)





小説

## 二度目の出産



真澄 丘

信子の心にもたしかに、今度こそは男の子であることを信じてゐた。そして夫の定夫の心からよろこんで呉れるその時の光景、笑顔で迎えてくれる、やさしい、いたわりの言葉がまだ出産と云ふ山を越えてゐない、信子の心をわくわくさせた。佐江子のお産の時感じた、苦しい陣痛も、六年すぎた現在の信子には自分の過去の経験の中からスワカリ、消え失せてゐた。元氣よく初ごえ立てて生れてくるであらう、まだ見ぬ愛児が、夜のベッドの中に息を信子の左の腹を何かの調子で衝き動かす時、信子は軽い微笑をもつて、さながら愛撫するかの様に自分の腹をなでてゐた。そして男児が生れたらそれこそ定夫によりこんでもらはうとやはい、あまえた自負心を以て思ひつめてゐること一度ではなかつた。

『久しい間欲しいと思つてゐた子供が六年振りに……佐江子がよろこぶよ。』定夫は自分のよろこびを吾が子の佐江子の名に負はせてよろこぶ程まだ純な心で信子に語つてゐた。『ママ 何時おスピタルに入るの？ グクターがベビー



祝ひしたのがんやしいのか、夢判断の書  
物がんやしいのか、一寸判らん、免に角、間  
違つたらんやしいから。

○判断が違つて祝ひ、夢となり。

祝が『ふい』になつたと云はずに『夢となり』  
としたら、君の云はんとする所が句になる。

△あの夢の續きよい魔が一すかくし

此の句の意味は充令判り兼ねるが、『一寸』  
かんし』と云つて終つてはいかん、邪魔をす  
る』としたら隠した事になるでせう。

△あの夢を邪魔する夜半の下駄の音、

あの夢とせず、會ふ夢を』とすればよい。

△神経家夢判断で、出所止め、

○神経家出所見合す夢判断、

と兄て川柳は言つて終つてはいかない、『見  
合す』と云へばまあ止める事になるが若し  
違夢と解つたら出所するでせうから。

鈴木 緑 松

△マラソンの子は決勝の目が暗み、

『決勝』と云り(口語体に)過ぎて之では  
訛りですから(い)の代りに(に)とするがよい、

○マラソンの子は決勝の夢を追ひ、

△草相撲夢に思はぬ全勝旗、

○全勝旗とつたは夢の草相撲。

△山火事に夢中で走る焼野原、

○山火事に夢中で天幕片付ける。

△夢の間に親父懇いた大野原、

○夢の間に親父懇いた茅畑。

君の『會議所の便所』載せません。

後記

添削には困りますが、初歩の者が毎回殖  
えるのは喜びです、然し充令批評が書けん  
の、物足りないうでせうが御勘辨を願います。

◎次回添削課題

『心』 締切

紙上互選 次第に掲載



もあくる日もミルクも取らず、――プものまず選上のまゝ、身を横たえてゐた。看護婦に抱かれた愛児が人生に崩れ出でたよろこびを奏でる泣聲に信子の心はいつとはなしに柔いだ。『さうだわ、わたし夫の心を思ふ時、あたしもやつぱり男の子がほしいと思つてゐたの、吾が子なればこそ心やすきにまは自分の希望の充たされなかつたことをツイ心から滑らせだまでのことだわ。すべてはあたしの業とあきらめて、おわびする心をもつてゐたら、夫の足許ばかりみつめて、怒るわたしはもつと自分の愚さと業とに耽入らねばならなかつたのです。』……フトこんな心につゝ、まれて淡く入る朝の光線を見つめながら獨言の様は口を動かしてゐる枕許のドアをあけて入つてきたのは佐江子と定史とであつた。『ママ、ミールうれしいよ。ミールのレスターが出てドクター連れて行つてもいいと云つたの？』定夫は眞面目な面持ちで信子のほとりに佇み、信子ゆるしてくれ、僕がついお前の心にさばることをあつてすまなかつた。佐江子も同じように僕もよろこんでゐるのだよ。』信子は天井を見つめ乍らきいた。そして凡て人の心を省みさすことは、自分自らが省みる心を持たねばならぬことを今はつきりと知らされてゐるやうな氣がした。信子は自分の心の中を凡て定夫に打ち明けた。可愛い、ベビーに『省子』と命名したのもその日だつた。

終。



をくれると云ひましたの……ミ。ガールがほしいよ。ミのシスターがね。ほん心から云つてねだつてゐる佐江子の要求を夫婦はうなづきなからも苦笑してきいてゐた。

漸くポストンも砂塵を巻き上げるサンドストームの訪れた今朝は朝から午り午り暑くてあちこちに巨人が錐をもみ込む様な砂煙がまひ上つてゐる。幼稚園に佐江子を出した定夫は信子の安否を心にし下ら近所歩るきもせず待てゐた。突然ドアを叩く人の音。早く来て下さい。定夫はポーケにつなかれた飼犬が自由の身になつて走り廻る様に一目散に駆け出した。病院の前の畑中を真一文字に横切つた定夫は吸ひ込まれる様に信子の病室にとびこんだ。鼻につく消毒薬の臭も今は一入うれしい思ひ。定夫は目をギョロつかせてゐた。ベッドのはとりの看護婦が「おめでとく御ざいます。嬢ちゃんも御面人御元氣ですか。』きいた定夫は一步後に退いた。同時に心の中に鋭くひらめく何ものかいあつた丁度夕立後の太陽の様は一箭……「え、また女の子が。思はず口をさして出た。漸く陣痛の苦しみから開放された信子には今の言葉がグツと胸をさした。そしてガバとシーツを顔において、さめぐと泣いた。「又女かとは何と云ふ夫は情も同情もない人だろう。わたしをなぐさめる言葉も知らずして、神や佛でない限り思ふ様になるものか。わたし一人の責任ではあるまいに……」だまつて涙をからす信子の心は夫への憤怒の心で満ちられてゐた。そしてその夜



折柄引つ切り無しに見舞に来る人々に、

『どうも皆さん御心配かけて済みません、お蔭で誰も怪我が無いのが何よりです。寝る所は空家が澤山あるし、食ふ事には心配は要ないし安心なものです。』

アハ……と朗かに笑った。

翌日から藤木老は二人の息子と近所や知人の手傳ひにきてくれた人々を相手に何の屈折もなく、二日ばかりで新先の造作をしてしまい、一家寛いだ時、孫も膝の上のせて家内中の皆に、

『おれが四十年前、アメリカに出稼にきた時は、それこそ着のみ着の儘の裸一貫だった。少し金を溜めて寫真結婚で妻さんを呼び寄せてからも、後からくお前達子供が出来て、苦勞しずくめだったよ。お前達が大きく成る迄は病院の事も、セキメンバンバイオーライハウスとおふ様な英語を使つて、白人達に虐められながらやつてきたのだ。漸くどうにかこうにかやつて行けるやうになつて、新一は嫁を貰つて孫もこしらへて呉れるし、もう譲治にも嫁を貰はなくては成らないし、君子は嫁にやつたし、美代子も久子も年頃になつて、是れからといふ所へ戦争でこんな所へ入れられ、その上今度の火事で持ち物は全部丸焼けだが、そんな事でこのおれは屁古棄れないぞ。』

傍に居る老妻が、

『父郎さん、そんな言ふけれどわしやー、がっかりして何も手がかんぞなあ。』





## 一世の氣概

小川積三

十一月に入ると流石灼熱の天地がストーンも秋らしく、コ川河畔のカットンツリーも黄ばんで杵柄の北風に煽られて、ばら／＼散つて居る。こゝがストーンは今夏の或る日仕事を持つ人々はそれ／＼出掛つて、家に居る者はそろ／＼睡氣を催してくる午后二時、一寸廻った頃突如第一キャンブ西北にあがつた黒煙、スワー火事よと人々が駆けつける間に、紅蓮の焰は火元のバラックを一咭めにし猛りに猛つて隣接のバラックへ燃え移つた。時を移さず駆け附けた消防隊必死の努力によつて漸く消し止めたが、二軒とも一時間足らずのうちに全焼、まだ焼け跡が生々しく、ぶす／＼と煙つてゐる所へ、近くの農場に働いて居たH縣出の藤木老人が息せき切つて馳せつけ、焼跡は見向きもせず、遠くの方に怯へて居る女子供の一群を見付けると駆け寄つた。その老人を見ると女子供は、あーつと泣きながら老人にしがみ附いた。

「何を泣くか見つともない人が見てる」と言ひ乍ら一渡り皆を見渡して、

「誰も怪我は無かつたか、さうか」よかつた／＼と一息して今更焼け跡の方を見返り、  
「なんとまあ、よく焼けたもんだなア」



『藤本さん一世の方は偉いと云ふ事をあなたに依つて如實に見せて貰ひましたよ。』と言へば老人はてれくささうに、

『何そんなでもないよ。一世が此の國に來た時は皆血氣盛りで働き自慢の者ばかりさ。正直と働きによつて白人社界から信用をとつたものだ。そして君達ちの様な二世を育て上げる迄は、子供が大きく成つたらと、そればかりを樂しみに血みどりで縁いだつた。戦争といふ不可抗力でこんなに成つたが此の先何年此所に居る事になるか知らないが、四年や五年で銳る様な、そんな生優しい腕や心を持つた一世は一人も居へんよ。』と一寸息して、

『こゝろ喜ぶ話がある。ある一世が鉄道に沿つた白人農家で主人から豚のワツケを言ひ付けられた。丁度その時豚群の居る所で汽車が汽笛を上げたものだから、豚群驚いてフェンスを破つてどーつと逃げ出した。日本人は早速主人の所へ駆け附け、トレンカム／＼。ポツ／＼、ヘンスバラ／＼、ベーコンボーイゴーウエーとやつたもんだ。考へても見よ、こゝろ言ふ英語を使つて虐められながらやつて来たもんだと思へば、よんも是れで来たものだと思つながら感心するよ。お前達二世の様に、果はグローセリから、魚はマーケットから来るもんだと思つて居る者とは少し價値が違ふよ。』

『お前達ちも一世はもう駄目なんて言ふなよ。一世の平均年齢が、是からだとは、錫銅色の節くれ立つた腕をぬつと出した。一同思はずどつと噺し立てた。



まだ何が言はんとすると、抑へ付けるやうにして、

『何を言ふか婆さん、平和になれば日本へ帰るとも此の國に居るとも俾共を相手に亦えの奎阿福からなりださなければならぬのに、今からそんな弱音を吐いてどうする。』明日は婆さんいつものやうにケツチンへレプに行くと、新一譲治も美代子も久子も皆傷みに行け。家には今迄の様につやが一人で留守して居れば澤山たなつや。』と嫁の方を見て言つてから傍にぼんやりとして居る三番息子に、

『こゝろ譲治何をぼんやりして居る、スイート、ハートの所へ行つて可愛がられてこい。』と、ぼんと背中を叩いた。一家鬼はすどつと笑い崩れた。

火事から三日目の朝、藤木老は元氣よく仕事場に出かけて行つた。大勢の同僚がびつくりして、

『藤木さん、もう今日から仕事ですか。』

『皆様一昨日は何かと御心配をかけて済みませんでした。何しろ焼け出される早々ホストン金キャンアの皆様からお金や着物日用品を山程戴いて其上何かと御心配に預つた事を思へば、一日だつて皆さんに對し、じつとして居られもしません。わしやアメリカに来て四十年間まだ一滴の涙を出した事はないこの目から、昨晩は一晚有難涙が出ました。くよくよくしたつて元通りにも成りません。皆さんのお蔭で焼肥りに成つたかも知れませんが。』と言つてあは……と朗に笑つた。その時二人の二世が、



手紙で大きく三つ折になつたのが一枚出て来た。始めて何事ならんと訝りつゝ、眼を落せば、收客所學務課と嚴めしい書き出しに、さては一子秀雄の事かと早や既に總ならぬ胸騒ぎを覺へた彼は心持平のおのゝくさへ感じつゝ、手紙を讀み出した。

彼等のタワター一人の子供秀雄は今年七才、昨秋から他所の子供達に一學年に入れ貰つたので夫婦の喜ば如何ばかり。習ひ覺へるABCに夫婦顔見合せて微笑んだ事も幾度があつたが何と云つても脱臼盛の男の兎として文字を覺へるよりは友達と喧嘩をするのが樂しみな位のいたづら盛である。今迄も友達を泣かせて親元へ訛に行つた事も幾度があり。余りいたづらが過ぎるからとて學校から飯へされて戻つた事も二三度あつたので學務からの手紙に若しか？、秀雄は何があつたのではなからうか？、と悪い予感に胸騒ぎを覺へるのも武治の場合、父親として無理からぬ感情であつたのだ。その騒ぐ胸を抑へて讀んだ手紙には、

今年も學年末となりましたので、本課では次期就學児童の編入に就いて委員會を設け慎重に児童各自の學力を檢閲なし外部に於ける公立學校生徒の能力と比較研究の上各學級を決定すべく最善の方法を講じて居ります。と言ふ書き出しで。

この慎重な試験の結果若し生徒の能力が不充分であつた場合は今一年その





小説  
落第生

太地 潔

今年の夏は例年よりも遅れてゐるとおつても流石ホストンだ。六月に入ればジリ／＼と照りつける初夏の太陽はグン／＼と水銀を昇らせて午前十一時頃ともなれば体中ジワトリと汗ばんで来る暑さである。

武治はいつもの通り日課の仕事だ。彼の日課とは毎日食堂に行つてクツクのヘルプをするのが仕事である。今日も平常の通り朝の食事も済み中食の仕度も終へての一刻を一憩する積りで我彖に帰り汗ばんだ体を拭つて心地良げに、クーラーの涼風を満喫して居った。

椅子に倚つてクーワと吹く煙草の煙と共に只今刻んで来た鮮らしい胡瓜の青い香がプーンと鼻をつく、寛いだ朝の一刻である。フト武治の眼にとまつたのは側のテーブルに投げ出した見馴れない大形な白い封筒一枚である。何心なく手に取り上げて見れば、差出人の名前はなく只中央にミスター エンデミセス タケジ ミヤモト と小さなタイプライターの家が印刷されてあるだけだ。彼は無難作に封を切つて見れば中から出たのは是れも同じタイプライターの英文



また。文代！俺の子供一人さえ生めないお前と夫婦になつた自分の馬鹿さが怨めしいわい……と云つてしまふと又してもさめぐと泣くのであつた。愚痴だ。全く愚痴だ。愚痴と知りつゝ、武治は思ふのであつた。あの時さへ無かつたら？。そうだ、それは今から十二年程前、武治がまだ三十才、加州桑港にゐた頃だ。若年にも拘らずその才能と技術とを認められて某商會の支配人を勤めてゐる頃、フトした機會で當時某料亭でウエトレスをしてゐた今の妻、文代と知り合つたのは、

武治はまだ若年の上に初婚なのに比べて文代は二度も結婚に破れた経験があり、彼より五つも年上だつた為め、武治は最初から文代と結婚などする意表は毛頭なかつたが、文代の方から無理矢理に同棲してしまつた。同棲の後も幾度か彼の方から、「別れ話」は出たが、その都度友人が仲に立つてその儘でズル／＼二人の生活は續けられた。多感な武治は人一倍予煩悩で年と共に自分の子供を歎しがつた。彼が三十五、六歳になり中年が近づくに従つてその本能が烈しくなつたが、不幸文代は已に妊娠出来ない女だつた。之が二人の間の圓滿を缺く第一の理由だつた。いつも武治はせめて自分の子供を生んで呉れたら、何事も運命と諦めるものを……と思ひ、時には之を口に出して彼女をの、しる事もあつた、それが今から丁度六年前である。彼等の友人が世話をして、「子供を一人養子にしたら二人の仲も圓滿に行くだらう」と云ひ出して折よく生後未だ間も



學級に止まつて勉強させる方が本人の爲めだと存じます。

武治は斯る境遇にある子弟の教育の如何に困難である事を感じ當るにその努力を感謝すると同時に至極尤なその文意に寧ろ當然の事として此處迄讀んだ處が、その次の行に、

專家の令息秀雄は他の學課は免に南英語會話及讀方の能力不充分に就

き今年第一年生として、……………

武治は此處迄讀むとその先讀み續ける氣力がなく手紙を持つ手が震へて来た。眼頭が急に熱くなつてタイプライターの字が潤んで、ボーワとなり讀めなくなつた。又讀み續ける必要もなかつた。つまり學校當局から秀雄落第の正式通知である。

武治は只譯もなく泣けて来た。泣けて泣けて仕方がない。遂に大聲を擧げて男泣きに泣いた。そうしてそれ迄何も知らずに隅の方の裁縫ミシンに倚つてセツセと何か縫つてゐたが、いつにない夫の變つた様子に何事ならんとビツクリして支り傍に寄つて来た事の文代にどなりつける様に、

『マ、秀雄は落第ぢやないかい……………』と只一言、そして又してもオ、と泣き續けた。その鳴咽の中に『オ、秀雄の体に俺の血が一滴でも混つて居たら二人な馬鹿な兒ではない密ぢや……………』

落第する程馬鹿とは知らずに俺は秀雄の成長ばかりを楽しみに今日迄育て、



落第したから悲しいのではなく、あゝやつぱり俺の子供では無かった。と氣がつくと何とも云へぬ淋しさ、やる瀬なごの爲めに悲しくなつて泣けてゝ、仕方が無かつたのだ。そして又しても事を叱つた。

「子供一人生めないやうな女は出て行け！」と、どなつた。

文代は又かと胸に迫るものを感じて、サメ／＼と泣いた。そして何時の間にか遊び疲れて、眠つた秀雄に、「お父さんにお説きなさい」と頼に勧めた。

何時にない父の怒氣を帯びた様子に只オロ／＼してゐた秀雄も母親にすゝめられるまい、「お父さんごめんなさい。」と云つたかと思ふとワ－ワと泣き出した。文代も泣いた。

武治は又何か新しい感情に誘はれて新らしい涙が出て来るのをどうするにも出来なかつた。

(終)

ポストン文藝  
原稿募集

- 詩 (二人一篇) 選者 外川明  
○短歌 (三五首尚) 選者 長瀬勇  
○俳句 (三五句尚) 選者 和氣潮月  
○川柳 (三五句尚) 選者 島原潮風  
○創作隨筆其他 編輯部

九月號原稿締切七月廿日  
十月號原稿締切八月廿日  
原稿は必ず階書で認  
める事  
三十五字詰十八行



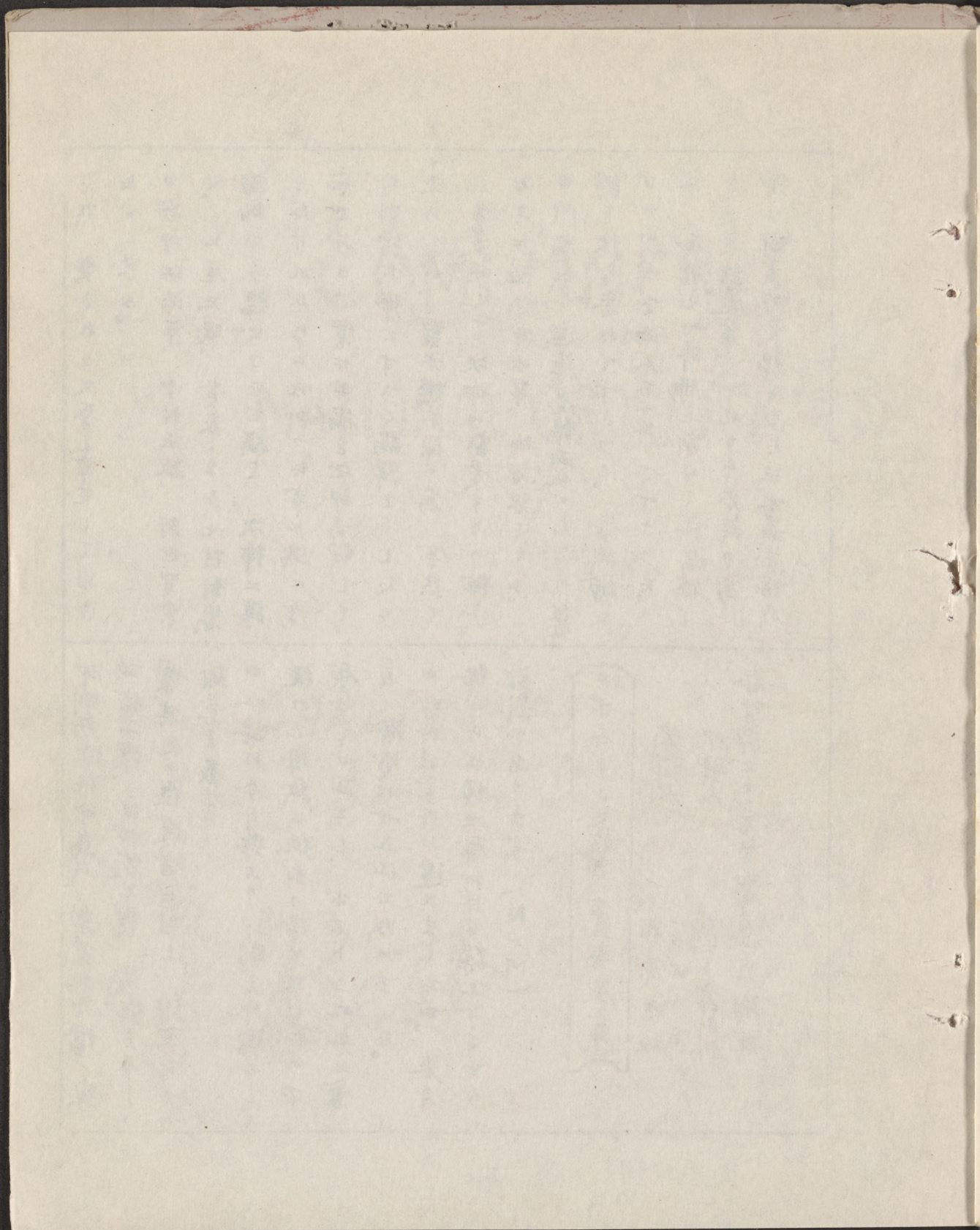
ない男の児。秀雄を養子として迎へたのは。

其後の彼等の家庭には多少の破乱はあつたものの、いつも秀雄を中心として何事も秀雄の爲と忍んで暮らして来た。殊に始めて子供を持つた武治の喜は一通りでなかつた。一年と経ち二年と過ぎ文支で六歳を迎へた秀雄は、去年の秋新學期が始まると、此處收容所で無事公立學校へ入學した。タウター一人の息子をも人並に入學さし得た武治の喜は又格別だつた。自分が小學の時から秀才で優等生を通し得た彼は、秀雄もいつの間にか養子と云ふ冷い觀念など無く持つて全く自分の實子と信じ切つて居た爲俺の子供は利発だ。秀才だ。将来医師にしゃふか。技師家にしゃうか、それ共日本へ連れて取れば士官學校か兵學校へ入れようか。何れにしても大學を卒業さして相應に仕上げるぞと只それのみを楽しみにし、一方專一對する不満と子供への愛情に依つて補ふ氣持にさへなつて只管秀雄の成長にのみ希望を抱いて暮らして来た。それなのに、それなのに、今學校當局から受けた此の通知。思はなかつた!! 思はなかつた!! まさか自分の子供が聞くも恥しい落第生とは。

武治は今や中年の四十二歳、いづしか培われた父性愛の本能から戒児とのみ信じ切つて居た秀雄を今年に持つ一通の手紙によつて信も。

「秀雄はお前の實子ぢやないぞー!!」と頭から叱りつけられた氣持だつた。そして愚痴と知りつゝ、泣いた。歎いた。怒つた。それは決して自分の子供が







## 編輯後記

●『ポストン文藝』が廢刊されるを聞いたんですが、若し事實とすれば惜しいですね。といつも温顔に笑みを湛へていらつしやる有田さんからさう聴いて、寢耳に水、『文協』創立以来の關係者である私はちつとも知らなかつたのである。『何とかして繼續したいものですね』私達二人がかうした會話を取交したのは大凡一ヶ月前。それより矢形主幹、次いで『文協』幹部との會見となり、其の結果私達が編輯、島原氏が協會の責任を持つ事に決定したのが五月廿二日。最も困難な、恵まれぬ條件の下に、涙ぐましい大きな努力を續けて雑誌を出してくれた矢形氏の後を継

ぐ私共の責任の重い事を痛感する。矢形氏の名を辱めぬやう、私共は微力を捧げ、最善を盡してよりよい雑誌を作らなければならぬと決心して居ります。寄稿家並に愛讀者諸氏の御鞭撻と御助力を切望します。●君達がやるとすれば、文藝から離れたものになるのぢやないかと友は言ふ。乞ふ友よ、憂ふる勿れ。我々は純文藝を尊重しつゝ、然も同胞の誰もが讀んで、いんらかでも精神的慰安が得られると同時に、情操を高めて行けるやうな綜合雑誌を作りたいと云ふのが『雑誌』発行以来、矢形主幹はじめ我々同人の念願であつたのである。我々は純文藝を尊重すると同時に、大衆に最もよく理解



COMPLIMENTS  
FROM  
NATIONAL GROCERY CO.

MESA, ARIZ.

*Wholesalers  
of  
Quality Groceries*

CAKES & PIES.....

THE SAME HIGH QUALITY  
AS BEFORE THE WAR

*Best Bakery*

PHOENIX, ARIZ.



され、愛される又勢を尊重してゆきたいと思ふ。

●谷川江浦草、中村正敏、阿世賢紫、  
海、土屋天眠、貴家しま子、北村利恵、  
諸氏から賜はつた玉稿を、次第に譲  
りなければならなかつた事は誠に残  
念である。實は玉稿を全部掲載して  
特別増大號とすべく編輯までしたの  
であるが、製本機不備の爲、突然そ  
れを変更して次第に割愛するの餘儀  
なきに至つた次第、御諒恕を乞ふ。  
●門脇仁、進藤虎龍両氏が私共の懇  
請を快く容れて下さつて、表紙繪及  
びカツトを兩人で畫いて下さつた。  
又、御忙しい時間を割いて御寄稿下  
さつた諸先輩、それから本誌の爲に  
特に御盡力を賜はつた正木翁を始め

印刷所主任中島氏、奥重久子嬢、森  
西信子嬢、西田花子嬢、浅野メリー  
嬢、其他の後援者に對し、深厚なる  
謝意を表す。

●本誌は今月號より印刷を片面とし  
従つて用紙は従前の倍となつたので  
會費を廿仙とし、ポストン以外の會  
員の會費は廿五仙と改めました。

●料金は意外に遅れましたが、来月  
號からは順次発行日を繰上げてゆく  
計劃であります。(N・M)

ポストン文藝 第二卷第五号

編輯人

松原信雄  
有田百

印刷人

ポストン印刷所

發行者ポストン文藝協會島原潮風



To Be...



JULY  
1944

